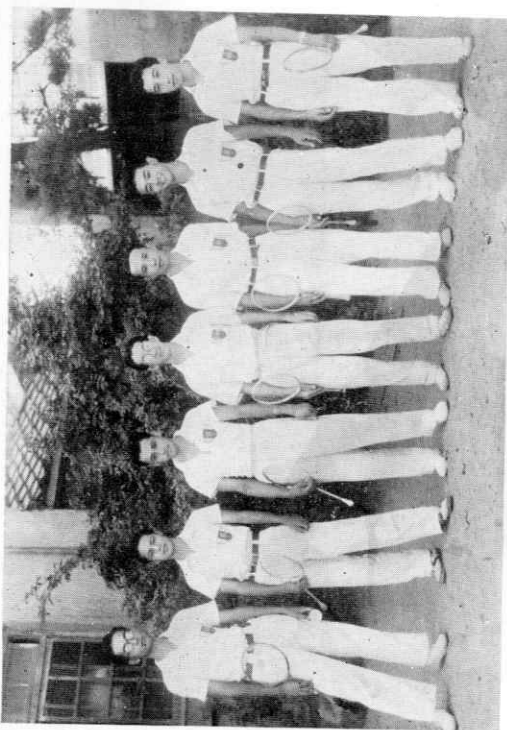


部 初 合 宿

於 新 潟  
25 年 7 月

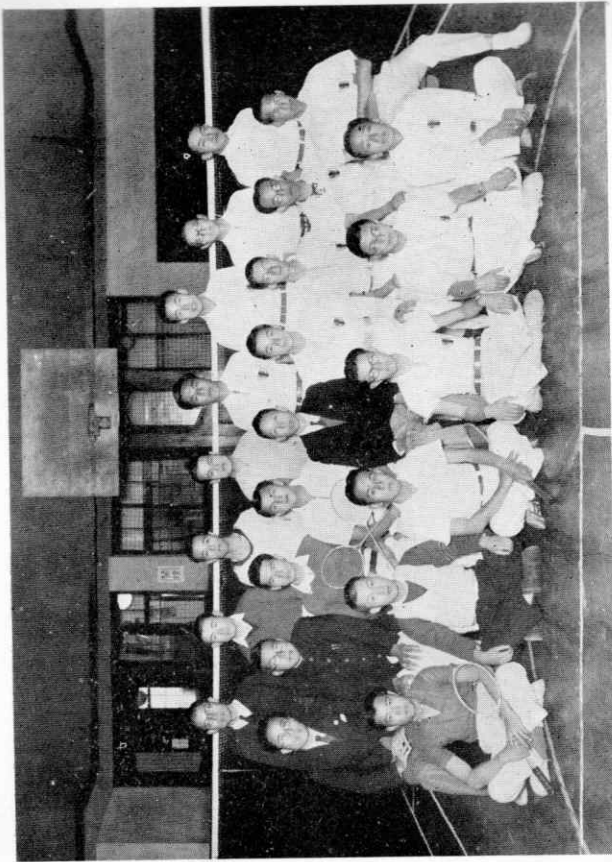
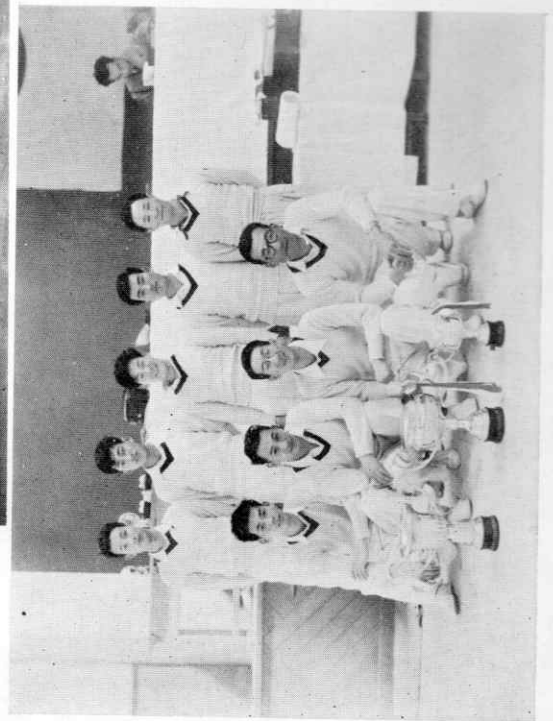


全 日 本 学 生 第 三 回

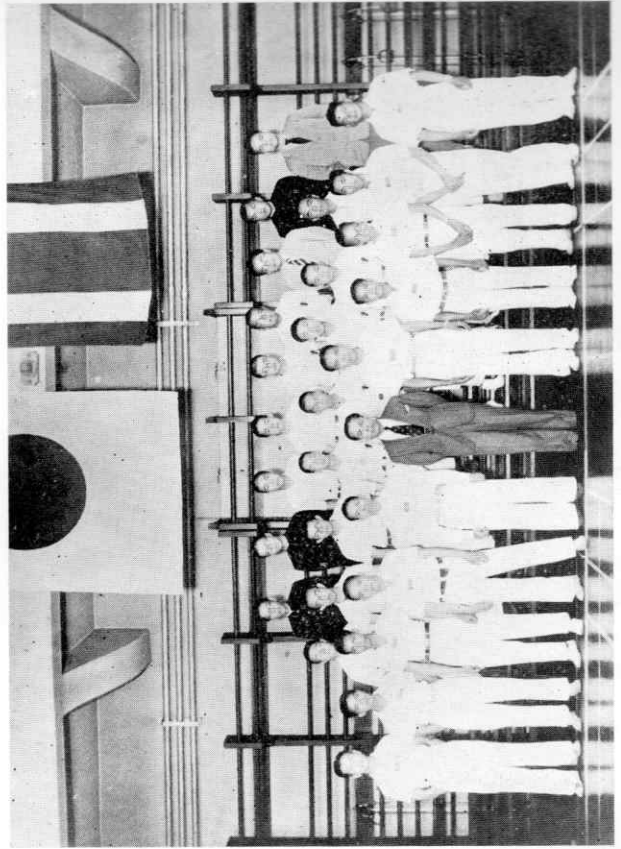
27 年 11 月 神 戸 王 子 体 育 館

28 年 5 月 於 新 潟

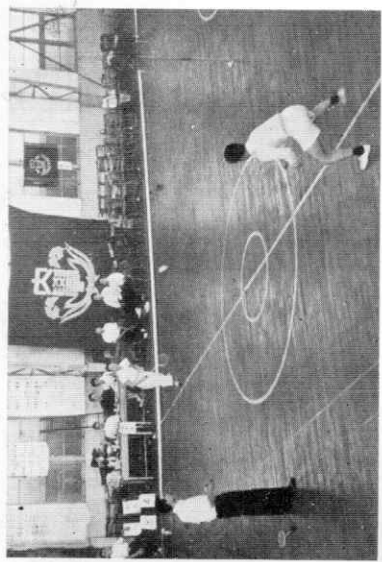
全 日 本 選 手 権



部 結 成 記 念 昭 和 17 年 10 月 於 横 浜 Y M C A



対 タ イ 留 日 学 生 軍 18 年 10 月 於 東 京 Y M C A



第三回慶早定期戦

30. 9. 於杉野体育館  
高側石田君

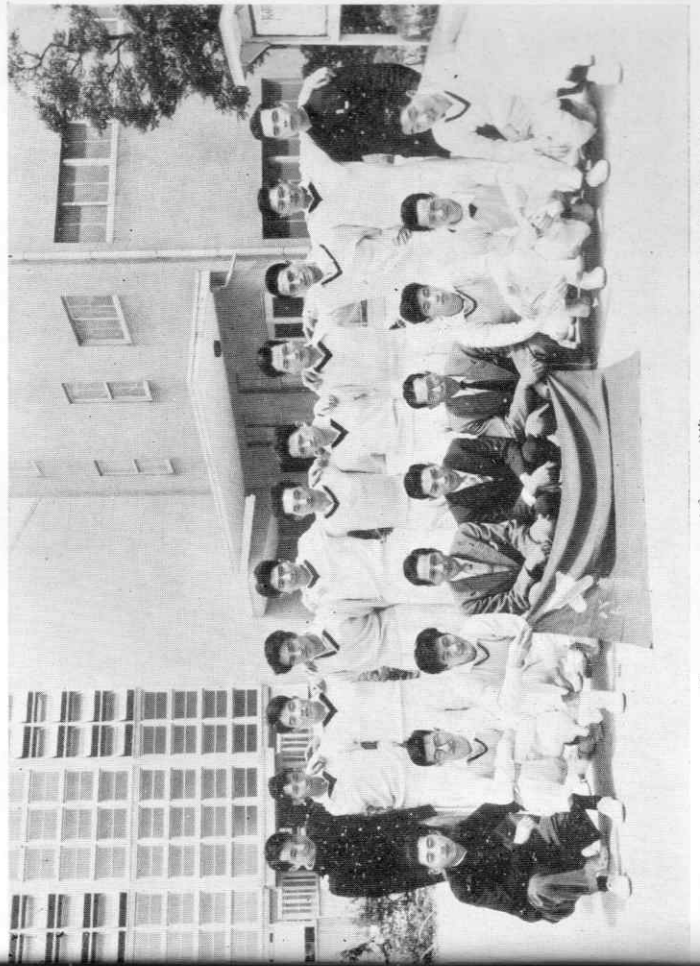
32. 11.

36.

36.



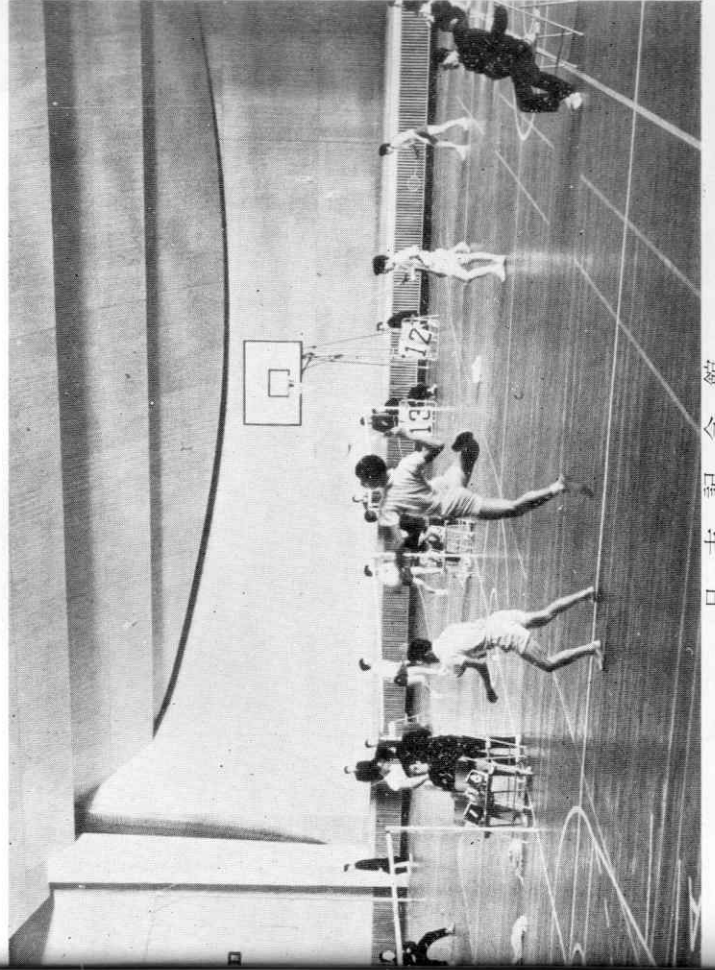
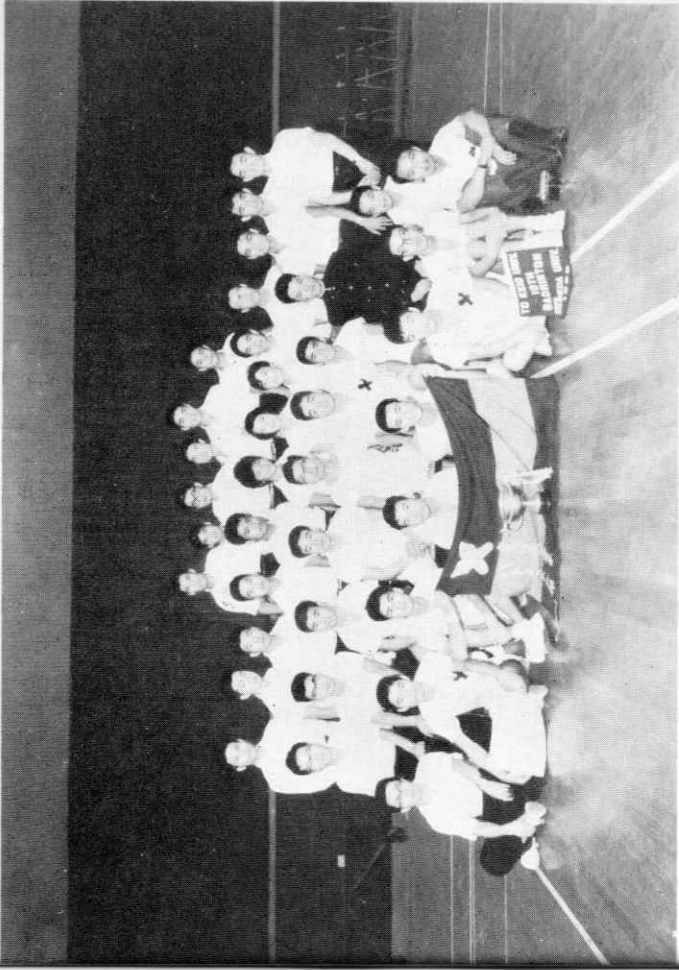
優勝記念 29. 6. 6 於天現寺



リーグ戦 30. 4. 於杉野体育館

## 目 次

創部二十周年記念を迎えて	.....	部長 白石 孝	(一)
おもいでのあるこれ	.....	三前田バドミントンクラブ会長 奥井 復太郎	(二)
こもごも	.....	兵藤 昌彦	(三)
創部二十年に際して	.....	日本バドミントン協会理事長 森友 徳兵衛	(四)
		岡 道明	(五)
たわごと	.....	六角 勉	(六)
二合五勺	.....	前田 鑑二	(七)
		大塚 伊二夫	(八)
		吉 永 増 徳	(九)
学 生 時 代	.....	内 田 博 道	(一〇)
広田先輩から宮永君まで	.....	石 田 裕	(一一)
		坂 俊 平	(一二)



創部二十年に際して.....	吉	田	格	磨.....(三〇)
合宿生活の思い出.....	鈴	木	嘉	明.....(三一)
部生活の思い出.....	岡	本		圭.....(三二)
		楠	三	郎.....(三三)
私の秘密.....	牧		洋	子.....(三四)
学生時代日記雑感.....	尾	関	守	弘.....(三五)
	福	田	竜	太.....(三六)
部創立二十周年に思ふ.....	野	島		義.....(三七)
我々の時代の思い出.....	小	杉	良	雄.....(三八)
部生活雑感.....	松	田		均.....(三九)
	山	中	武	一.....(四〇)
部創立二十周年に寄せて.....	宮	永	武	司.....(四一)
創部二十周年記念後記.....	久	米		融.....(四二)
あとがき.....	安	川	通	夫.....(四三)

## 創部二十周年記念を迎えて

部長 白石 孝

まず、創部二十周年をむかえ、諸君と共に、部の発展を心より祝いたいと思う。

バドミントン部は体育会の中では戦後の新しい部の一つである。それだけに、部の発展をはかるためのO・B・学生の苦労も多いことであろう。殊に、慶応義塾でバドミントンをはじめ、クラブから体育会における一つの部にまでつくりあげた当時のO・B諸君の努力は、非常なものであったろうと推察している。そして、このパイオニアの時代から今日まで新しい伝統をつくりあげて来た人々の活躍も、吾々として忘れ難いものがある。これらのO・B諸君の努力は、ただ塾のバドミントン部の創設から発展に貢献しただけではなかった。わが国におけるバドミントン界を刺激し、その育成と発展にも寄与するところがあつたといつても過言ではない。その意味では、部の二十周年をむかえて改めてかえりみる年月は、わが国のバドミントン界の発展史の一駒でもありはしないだろうか。

私が奥井部長の塾長就任にともなつてそのあとをうけて部長になつてから、もう数年になる。他の体育会の部に比して、数少いO・Bがつくりあげたこのバドミントン部が、学生スポーツの神髄を発揮して健全に発展してゆくのを、ただ見守る役目しかもたなかつたが、心では良い部の部長となつたと満足し、これまでの努力にむくいるところがあればと考えてきたつもりである。しかし、塾がバド

ミントン界のバイオニアとしての役割を果たした後、直面したのは他校の著しい技術の向上であり、競技は次第に苦しいものとなった。私が部長に就任した時は、丁度その転換期にぶつかっていたかと思う。競技成績は、そのため逐年かんばしくなく、O・B諸君に切齒扼腕の思いをさせて来たことは、なんといつても残念である。

ここに、二十周年記念をむかえ、これまでの足跡をかえりみ、捲土重来を期する気魄をもって技をみがき、部が一層健全に発展してゆくことを、共に期待してゆきたいと思う。

## おもいでのあるこれ

奥井復太郎

時というものは永いものか、短いものか。わがバドミントン部が創立二十年ということでその憶出を乞われたが、この二十年、本当に永かったのか短かったのか。

森友さんとはその在学時代、別のことで知り合いであったが、バドミントン練習のため白金小学校(?)の体育館を借りたいかと、当時学生局(今で云えば学生部)に勤務していた私のところにそのあつせんを求められた時にはじまる。私は子供の時から羽根つきが上手で、そのためか西洋版であ

るバドミントンには好意を持つことになつたとも云える。部長として関係するようになったのは、その直後か、葉山町、つまり私の近所に住んでいた当時の仲地君が口を切つたことからである。前記の好意、つまり私の主体的条件も整つているので易々と承諾してしまつた事が今日になって及んでいるもとなのである。あげくのはて、全日本学生連盟の会長にすら推され、それも今日まで永年にわたつてその席に留まつている。

故に永いとも云えるし短かいとも云える。待望の体育会入籍も成就したが、その後、近來この大事な部の部勢振わぬことは、いささか淋しい。先輩や部員諸君が皆、一生懸命にやってくれているのだが、これが塾の学校としての性格によるものか、こんな始末に切齒扼腕こそしないが、何んと申しても意気大いにあがるとはまいらぬていである。

この年間を顧みるといろいろの事があつた。幼稚舎の体育館を使わせてもらつていた。いろいろ文句もいながらも、何んといつても本当に有難かつたと申上げる以外にない。日吉記念館が出来て、あのようにこの問題が解決するということは当時として到底予想が立てにくかつたから。

潮田塾長の頃に、大ホール再建の議があり、百年祭式場の事が話題に上つたが、その頃から私は、将来の学内行事の会場は数千人を容れる規模でなければ駄目と考え、更にそういう大建築となり、平常時に利用出来るということを考えるならば体育館的(屋内競技用)に設計する以外にないと思つて、体育館兼大講堂案を提唱した。幸いこの議が容れられて日吉記念館となつたのだが、それが為に、独特な設計を以て、現在ある型で誕生したわけである。「記念館」と名づけられて、体育館と呼

ばない理由もそこにあつたので私としては、ひそかにこれでバドミントン部の問題も片づくどホッと  
した次第であつた。文字通り平素は屋内体育の殿堂であり乍ら、一朝事ある時には内外共に荘厳な記  
念堂として利用出来ることは何よりもうれしい事である。

人の事について云えば森友さんの監督時代からはじまる。「わが交遊録」に私の名を森友さんがの  
せてくれた為、諸方面から私とバドミントンを結びつけてくれる事となつた。結びつけるといえ  
ば、大会の催される地方では三田会の先輩の方々に有力な応援をしていただいたのもたのしい思い出  
である。次に吹野さん、その時に前田さんが助監督だつたり、そして岡君という順序だつたかしら。  
私が関係していた頃活躍していた選手は藤井君、それに次いでか広田君、その頃から私も大分判つて  
来はじめたということになる。インドネシアのイスマイリ君も現れた神戸での大会は印象的だつた。

部の憶い出でなく選手権大会のことにもなるが神戸の大会で吉原と江井とが激戦をして、吉原君の  
ケイレンで試合が一時中断したこと、京都では女子軍大いに振つて多分三位か二位に上つたのはよか  
つたが、男子軍の声援が少々はげしすぎたらしいこと。その時がんばつたらしいだれ、それ君の顔も浮  
ぶ。この時は全体に試合が長びいて、会長自身が閉会式をやれず、所定の夜行で帰京してしまつたこ  
と。東西対抗大阪の陣では出場メンバー変更のことで大いに揉め、それに腐つてか、東軍が大敗、立  
教の佐藤までがシングルで負けるという始末。

そう書いて来ると私自身もバドミントンには少なからず、変なまわりあわせがある。大阪では(東  
西対抗)体育館内の酷しい寒さのため発熱し、とう／＼列車にのるまでの数時間、大先輩T氏のお宅

にね込むという始末。このT氏それ以来もしたしくおつき合いがあつていたが先頭なくなつた。京  
都では丁度文部省の用で出張してゐたのと大会とが一緒になつたが、大学視察の仕事がきつたの  
で大会がはじまつた頃は旅先の宿で病臥中ということ。札幌では夏ではあつたが夜中冷えるのとビー  
ルをのみ過ぎたのがたつてお腹をこわす……なぞどうも散々な始末。その度に皆さんに御迷惑をか  
けたことばかし。

でもこの部を通じて皆さんと親しくしているのは本当にうれしい。若い諸君の結婚式にまねかれて  
御慶び申し上げた事も少くないが、他の大学の方々のそれにまで御招きをうけるに及んだことなぞは  
塾のバドミントンのお蔭というより他にない。

と、いうことで永い間皆さんと一緒にあつたことを改めてよろこぶ次第であります。

兵藤昌彦

昭和十年頃、横浜YMCAデンマーク基本体操クラスでは体操終了後、残った時間をバレー・ボール、バスケット・ボール、バドミントン等のゲームをして過していた。そのうち同好の士が集って、バドミントン・クラスを設けて練習するようになった。

昭和十三年四月、小生の友人から大阪の親類の者で山本孝二というのが塾に入つて、横浜のYMCAのアパートに居るからよろしく頼むと云われ、同君を探し、運動は何をやるかと尋ねたら何もやらないとの返事なので、学生時代の良い思い出として、Yに泊まっているのだしするから、バドミントンをおやりなさいと勧めた。一方、全時に北海道から塾に入り、同じアパート内の佐藤保君にもやるように勧めた。それから間もなく医学部一年の満州国出身の寿君が仲間に入ってきた。この人も同じアパートの住人、長身の好青年であった。塾の一年生三人が集って楽しく練習した。斯くしているうちに、アパート住人以外の塾生も加わってきた。その一人に加賀君(旧姓仲地)がいる。現在、大阪に居られ、先年、神戸でのインカレの時には、遠路神戸まで毎日足をはこばれ大変御世話をして下さった。又、大阪で優勝祝賀会を催して下さる等種々御配慮いただいた。紙上を借りて御礼申し上げます。下阪の折りには御拝肩願っている。

現役諸君、良い先輩ですぞ。

大阪に行かれた時には、是非御尋ね下さい。そして、現況をお聞かせ下さい。

喜んでくれますよ。

夏休みになると、大阪・神戸のYMCAに遠征、(そのメンバーは殆んど塾生であった)又、横浜YMCAともよく練習ゲームを行つた。YMCAで練習していた塾生諸君が、友人に呼びかけて出来たのが今日の体育会バドミントン部の前身慶応バドミントンクラブである。

学校でやるからには、先生方に理解していただくこと、クラブ員と共に三田山上の教員のクラブ・ハウス(現在大学院のある所)に伺い、照介秀々実演を二、三回いたしました。同所の庭、それから幼稚園(現在の体育会本部前の広場)で、その時、寺尾、奥井、加田の諸先生方がプレーして下さいました。

昭和十八年十月八日 この日はYCACとゲームを行う予定であった。朝のニュースは第二次世界大戦に入った旨を報じた。試合は当然中止、張り切つたクラスの面々は残念がったことであろう。翌年八月小生出征、外地で学徒出陣を聞いた。

終戦翌年六月病人として帰国、戸塚の国立病院に入院中、横浜YMCAの広田兼敏さんが病氣見舞いに見えた。自然と話は戦時中の模様、Yのバドミントンの様子等であつた。

そして新しい協会作りの話を伺つた(戦前神奈川県に、横浜YMCA、ナルトスポーツ、コロソピア、古河電線の四クラブに依つて協会が出来ていた。春秋二回リーグ戦等が行われていた。この協会は我国最初のものだらう。)

秋の某日、病院を抜け出して、東京田村町角の喫茶店で前記の広田さんに藤井光男君(O・B)と小生の三人で日本協会の設立について相談した。

終戦直後の塾クラブの諸君はシャルトコックが今日の様に充分なく、鶏の羽根を集めてつくる等大変苦勞した様である。

終戦後、大学の制度が改められ、大学の必須科の一つとして体育(講義・実技)が加えられた。実技の選択科目には三十四種のスポーツがある。勿論この中にバドミントンも含まれている。

当初、大学に体育館がないので、三田三十三番教室で、机を取り出してコート二面を作りネットを張つて、乱打、ゲームを行つた。此処は天井が低く、それに上から電燈が下つていて、ハイ・クリアが出来ず殆んどドリブン・フライト、ドロップ・ショットしか出来なかつた。学生数も少かつたので一応プレーする事が出来た。

次いで、幼稚園の体育館を借用して行つた。コートは二面で、一面に約四十名、総数八十名前後の学生が参加した。プレーするより自分の番を待っている時間の方が多かつた。中にはグラウンドに出て乱打するものもあつた。後に、午前の分、午後の分に分けて授業した。学生の方は半日で済むが指導を担当する側は午前八時より午後五時まで、一日八時間を十日間日曜日なしの連続であつた。

バドミントンを選択する学生が多くなり、幼稚園では実施する事が出来なくなつた。塾外の体育館を物色、幸い横浜の神奈川体育館を全日、十日間借用する事が出来た。此処は、中央にコート

四回開演は充分広く、コート外で、壁に貼付する事が出来た。然しトランペットの騒音なので午後になると熱風が吹き抜ける。学生、指導員共に非常に疲れた。

朝の如く、居候の様に各所を二、三年毎に点々と借り歩いて廻つた。久しく待望していた記念館が出来て、学内で実風出来る様になつた事は部員と共に喜びに堪えない。

昨年までは、南北の硝子に面して三面の常設コートが抽かれていた。実技の時にはこのコートの両側(バスケットボール・コート、器械体操場)に平行して、臨時に六面を抽き計九面で、約一八〇名の学生がプレーを行つた。硝子に面してプレーするので白いシャトルが硝子の中に入つて見えなくなる。それを見逃がすまいと見るので眼が疲れてたまらなかつた。実技の折りはかりでなく、部員の練習も同様に骨をおつていた。

前々から希望していたコートの向き(東西)の変更が今春叶つた。練習が楽になつた上に、更らに一面増加即ち四面になつたので今までより多く練習出来るようになった事はこの上もない喜びである。又、実技の方もこれにならつて両側に四面宛計十二面、記念館一杯にコートが抽かれ、従来、練習するよりも他人のプレーを見ている時間の方が長かつたが、今年よりは一面約十名で練習するので休む暇がない位であつた。この様に、十二分に出来る様にするために午前の分と午後の分の二部制にし、一部四時間で、残量厳しい八月二十二日と三十一日の十日間実施した。

他方、教年前より通信教育夏期スクーリングの際、通学生と同様に、体育実技の一種目としてバドミントンが行われた。今年は

一〇〇名、一日二時間で、五日間であつたが八月初旬の熱い時であつた。夏期休暇中二面も、部員諸君に御手伝願っている。体育会各部とも同じ様にやっていると云え、部員諸君の御苦労に厚く御礼申し上げる。

先輩諸君

今年部の全宿は前記の如く記念館で行われた。若手のO・B諸兄が指導に見えたが、古いO・B諸君がお見えにならなかつた様真に残念、老けこむのは早すぎる。自分から老年になるな、他の部のO・Bは熱心ですぞ、今春のリーグ戦の結果、御忘れでないと。責任を現役の方に帰することは出来ない。老舗に頼つてはだめだ。のれんに頼るな。

学生東京日本のバドミントン界をリードした塾、塾IIバドミントン、バドミントンII塾、長い黄金時代を思い出したまゝ。

再びその日の来るのを期待して止まない。

部員、O・B共に頑張れ。頑張れ。

体育会六十年史、(慶応義塾体育会発行)参照あれたい。

### 創部二十年に際して

日本バドミントン協会理事長

森友徳兵衛

茲に我が部創立二十周年の佳日を迎え慶賀に勝えない次第である。

に他の通商を許さない成長より弱しな。輔いて山本は漸くなブオームを身につけ、若しかるべきバドミントンに花やかさを添へ今日我が部に残っているタイプを作り出した功績は大きい。時にジャンピングスマッシュを創始したのは彼であつたと云う事は私は疑われないものである。仲地(現加賀)は学校の隣席が山本であつた関係と住所が横浜であつた為誘われて昭和十五年頃二人に半歳の遅れを以てバドミントンの勝となつた。定住で連日練習の機会に恵まれている彼等と当然技術の差があつた事は無理ではなかつた。当時のYMは全員がバラバラと集つてはそれぞれ適当にブレイを楽しんでた所謂社交的バドミントンであつて、春秋大会等に観覧大会を開いていたクラブであつた。

昭和十五年になると新入生として本塾医学部予科の寿祝高(瀧人)がYMCAのホステルに入り一緒に練習を初め、ひよる長い身長と柔かい身体とリーチを活かしてすぐ上手になり仲地を抜いた様である。寿のブレイはO・Bの小宮兄弟によく似ている様に見える。復はこの頃から佐藤仲地組、山本寿組が組んでYMCAでは単複共一、二位を占めて、広田兵藤岡氏外のYM会員を凌駕した。

扱私と諸岡はこの辺りから出番になつて来るのだが、二人共東京神田に住み席もモリとモロですつと隣り合い、彼は本塾商工学校の卒業等色々な点で行動を共にし、最初は田園クラブの会員となつて硬式テニスをやつてた。私は十五年の終りに山本に誘われYMCAでラケットを握つたのである。私はその後暫くは本当の時たまで二月月に一度位ブレイをした程度のものであつた。最

顧みて昭和十七年バドミントンを志す者が集り日本バドミントン史を飾るに成はしい事をなした事の意義が非常に大きいものを感じる。時移り人変れと二十拾年の星霜を光輝と伝統に飾つて呉れた幾多の友人後継者達の努力に改めて深い感謝の念を贈る。

慶応義塾体育会バドミントン部の創設時代即ち高天原時代とも云える昭和十四年・五年の頃については、現在在京の良友がないのでこの時代に触れるのは私の役目以外ならないのである。本文が私中心の文体となる事を諒とされたい。

私は昭和十四年に本塾普通部を修え経済学部予科に進学し、一年五組の末席を汚したのであるが、同級生に山本孝二(現大阪)加賀(旧姓仲地)幹雄(現神戸)諸岡良幸(現岡山)等の諸君が居た。又同年に佐藤保(現名古屋)が居た事がひいては今日の日本のバドミントンがかくも大発展をなした原因となつた訳である。

佐藤は北海道札幌市北海中学(旧制)出身、山本は大阪市北野中学(旧制)出身であつたから横浜YMCA内のホステルに下宿して学校に通つた。ここで彼等はその体育館で行われているバドミントンと云ふスポーツを見、且つ体育主事であつた広田兼敏氏(現日バ協会会長)や当時ツォリストビニューロー勤務の塾員兵藤昌彦氏(現慶応大教授)からその基礎を指導されたのである。特に広田氏からはバドミントンルール、審判技術、用具関係等全てを学んだが佐藤保が山本孝二より少々(数ヶ月か)早く門に入つた。勿論後年全日本成年単選手権者となり、又一般男子の上位ランキングプレイヤーとなつた佐藤は体質にも恵まれそのブレンワーク、フットワーク、スマッシュの威力等当時として極めて短期間

初にYMCAを訪ねた時兵藤昌彦氏、御慶賀を願つた事になったのだが、その理由の一つとして私の叔父(父の弟)が単複共二位を占めていて、卒業後も横浜で貿易商を営む傍らYMCAで練習をしていた関係で、当時は叔父は出陣中であつたが、一度で懐んで戴いた事を覚えている。兵藤氏は創部で叔父の一年後輩であり、之亦熱情を賜る事となつた次第である。

昭和十六年には諸岡が私と共に時たまYMに行く様になり二人はYMの会員となつた。この頃の私と諸岡はバドが従で硬球が主であり、十六年十月学部へ進学すると共に田園クラブから御茶の水ロケットテニスクラブの会員となつた。この間Yの人であつた四名の学生の方はYCAC等と観覧試合を行つたりしていたが、あく迄YMCAチームのメンバーとしてその時都合のよい者が瀧立狩り集められて出た様なチーム編成であつた。広田主事は勿論陣頭で単複共元気で活躍され広田、兵藤組は最近迄仲々大したものであつた。

昭和十七年の春に、山本、仲地は慶大バドミントン部の創設の構想を初めて、私に相談があつた。この頃になるとテニスよりバドミントンに魅せられて了つてた私は一も二もなく賛成し、共に手を携へ諸岡も同志として協力する事となつた。問題はこれであり学部の違つている佐藤の動向如何であつた。彼は巨に似合はず細かい神経の持主で(それ故にプレイヤーとして大成した訳だが)趣旨として賛成するが横浜Yのメンバーを抜ける事はYのNo.1としての立場や今日迄の広田氏の恩義に背信するから嫌であると云う態度で煮え切らなかつた。山本の考えとしてはYとの縁を切つ



てスッキリとした部(当時は体育会員である筈がないので、部の名称が使えず原語クラブを使ったが、全ての考え方は今迄のY.M.C.A.やY.C.A.C等のクラブ的でなく、もうろう部員を許さない方針で部として出発したのであった。)にして本拠を干渉されない東京Y.M.C.A.へ移そうと云うのであった。併し之には広田氏との誤解や(広田氏もプレーヤーなので相当な神経質である)反対を怖れ、日吉から三田へ通学が変ったから便利な東京へ、と云う段取りで進んだ。勿論横浜Yや東京Yの選手として出る時は部の関係ない時にしようとする約束であった。寿については丁度四谷に変わる都合で、その事に拘らず横浜Yは脱会して東京のホステルに変わる機会であった処、全面賛成であった。彼には別に干渉とか我が部の自主性とか排他性とか(学生の今も変らぬ共通点であるが)はテンから関係がなかった。現実には彼は横浜ではやれないのであった。皆が東京で練習すれば彼にとっては頗るたり叶ったり云う訳であった。佐藤の決心のため、かなり難渋したが山本、仲地以下の面々は仮に佐藤が入部してくれなくても団体戦で当って一番強いと思はれる横浜Yにも絶対に負けないと云う計画だけは立てた。山本・寿・仲地・森友・諸岡で勝てる訳なのである。併し佐藤・山本の間では次の様な法則が取決められて解決に到達した様だった。即ち佐藤は東電部員たる以上、東電との対抗戦に相手側として出る訳には行かない。又横浜Yにも今迄世話になった関係上その相手側に廻る事も出来ない。

即ち慶応チームが横浜Yと試合する時のみ欠席し、Y軍にも入らない。その他は全て慶大部員であると云ったものである。私と

しては佐藤も塾生として我部の為に同一行動するべきであると強硬に山本に対し主張し、結局結果的にはその様に落つた事は喜ばしい事であった。山本や私の考え方はYから離れる事が発展であり前進であったのであり、佐藤は浪花節があつたのであろう。後から考えれば誠に若かつたと云う事だろうが勿論広田氏は腹の小さい人ではなく結成後の佐藤以下のメンメンに何くれとなく面倒を見候かい気持で日本のバドミントンの為に育てて貰つたので、部の創設に学校関係をかけ廻つて戴いた兵藤氏を生みの親とするならば、技術や行動に力を貸して戴いた広田氏は育ての親であると云う事が云えるのである。後年広田氏の長男敏泰氏を終戦後我が部不滅の名プレーヤーとして迎える事になつたのである。

結果から見ればこの様にどうと云う事はないのだが、本当にその当時としては佐藤含めての我々の憶測は、佐藤・山本・寿・仲地の主力四名が分離した後の横浜Y.M.の戦力低下についても心配したものであった。

その夏が終つて十月に我々は学部二年に進級した。戦時体制下で軍事教練の盛であつた頃である。山本の手によつて他の部の部則を参考にし、慶大バドミントン部(慶大鳥球クラブ)——K.B.C.(体育会入会と共に奥井部長の手によりK.B.A.と改称した)部則がまどまつた。当時バドミントンの和訳に羽球と鳥球と二つがあつたが、我々は合議で鳥球の文字を使用した。語呂がよくて、又空飛ぶ白鳥を狐銃で撃つのを模したバドミントンの実体をよく表しているからであつた。

エース佐藤の決心も前述の通り定まつたので十月七日の三時に

東京Y.M.C.A.の地下倉庫で部の創立議案が行われたが、この時部つた者は左の通りである。

佐藤、山本、仲地、森友、諸岡、伊東(現日高)、村上(現日産自動車宣伝課長)、本田(東京ハット)、花島(陸軍で空中戦々死)、森友弟の十一名であつた。初代の主将には山本孝二が選ばれた。

この日から我が部に生命が与えられた訳で兵藤氏の骨折りで部長には経済学部教授(統計学)寺尾琢磨先生が就任して戴ける由で、私と山本の二人が池上の御宅を訪問した事を今の様に思い出す。今は亡くなられた奥様が御出で来られて大きな犬が寝そべつてゐる先生の書斎で御挨拶と励ましの御言葉を戴いた時は本当に嬉しかつた。先般奥様の御悔みに吹野前監督と岡監督と三人でお訪ねしたが先生に対する御無沙汰御詫びの気持ちも含んでゐた。先生は御留守だったが、後御町重に私に御電話を下さつた。何時もきちんとした先生である。十一月中頃によく晴れた日山本がナルトスポーツからテララインを借りて来て今の南側校舎の下(当時商工学校の運動場で私が幼稚舎生の時の幼稚舎運動場に張つた。綿のテープでコーナーをでどめた云はゞ組立式のもので畳の様な針で地面に止めた。前以て大先生方に、午休みに来て下さいとお願いしておいたので、教授連が歩を運んで打ち興じて下さつた。寺尾先生の御努力だつたと思う。奥井前部長、小泉、潮田と歴代の塾長方が面白がつて打つて下さつた。翌週も教員食堂の脇の芝生でテープを張つた。同じメンバーの先生方がプレーをされた。奥井、小泉両先生はお上手で我が部長はうまいと云う訳に行かず

併し我々も塾生として我部の為に同一行動するべきであると強硬に山本に対し主張し、結局結果的にはその様に落つた事は喜ばしい事であった。山本や私の考え方はYから離れる事が発展であり前進であつたのであり、佐藤は浪花節があつたのであろう。

後から考えれば誠に若かつたと云う事だろうが勿論広田氏は腹の小さい人ではなく結成後の佐藤以下のメンメンに何くれとなく面倒を見候かい気持で日本のバドミントンの為に育てて貰つたので、部の創設に学校関係をかけ廻つて戴いた兵藤氏を生みの親とするならば、技術や行動に力を貸して戴いた広田氏は育ての親であると云う事が云えるのである。後年広田氏の長男敏泰氏を終戦後我が部不滅の名プレーヤーとして迎える事になつたのである。

結果から見ればこの様にどうと云う事はないのだが、本当にその当時としては佐藤含めての我々の憶測は、佐藤・山本・寿・仲地の主力四名が分離した後の横浜Y.M.の戦力低下についても心配したものであった。

その夏が終つて十月に我々は学部二年に進級した。戦時体制下で軍事教練の盛であつた頃である。山本の手によつて他の部の部則を参考にし、慶大バドミントン部(慶大鳥球クラブ)——K.B.C.(体育会入会と共に奥井部長の手によりK.B.A.と改称した)部則がまどまつた。当時バドミントンの和訳に羽球と鳥球と二つがあつたが、我々は合議で鳥球の文字を使用した。語呂がよくて、又空飛ぶ白鳥を狐銃で撃つのを模したバドミントンの実体をよく表しているからであつた。

エース佐藤の決心も前述の通り定まつたので十月七日の三時に

為と云う程の練習をする人は居ず、幸いな事に私の次第に上達して来たプレーを破る人が出て来なかった。我々は月水金を練習日に定めバドミントンの時間は二面を、他の時間は一面を張って練習し、又昼でも他の時間で空いている限り一面のみは勝手に張って使った。職員は好意を持って見ぬふりをしてくれ、他競技はバスケット等半面で練習して呉れた。それでもバスケットの間にはバスケの人達が我々に空けてくれる様子に頼んで来た。この様な時は当然我々はすぐネットを外した。全体に今のスポーツマンに比して紳士で（余裕のある人のみがやっていたせいかもしれない）戦前ロッカーに入れ放しにしてあった運動靴（当時は貴重品である）が戦後そのままあった（使えなかったが）程で、その辺に置き忘れた物等は決して何日経ってもなくなるとは想像もしなかった位であった。この点今の人は羨ましいと思う。

戦争中なのでスポーツの利用度が低かったにせよ我々をバドの先生乃至指導員として扱ってくれて、「お願いします教えて下さい」「有がとうございまして」ときちんとしている彼等スポーツマンとYの職員達皆の好意を忘れる事は出来ない。本田さんは現在健さんと称され六月四日初めて協会から韓国に遠征軍を出す現在協力すると云う電話を載いている。

私は十月に新入部員募集のポスターをポスターカラーで作成し弟の居る日吉へ出かけ第一食堂の壁へ二人で貼った。カベ色地に黒でネットにその向う側にプレーヤーを影に潰して書いたものである。又コンパスを使って三色の楕円の両側に羽の垢がった部章も私が作成した。金ながしで作成して部員は全部それを着用した。

医学部の二年生で四谷に通う私には神宮に所属の部員と練習をした。二人だけの日が多かった。春には勝つ事もあったし、山本と練習した時ゲームを取った事もあった。アムをくれたのかも知れない。佐藤とは殆ど練習出来なかった。試合の日に顔を合せる位で、定期練習には来なかった。事情があったのであろう。佐藤には勝つ機会がなかったにせよ格段の差がある。

昭和十八年六月十三日（日）YCAC（横浜外人クラブ）と対戦し八一で快勝した。単六複三で次の通りである。（六月十五日（火）ニッポンタイムスの記事）記事中佐藤キャプテンとあるのはZの意味かと思う。

仲地は出なかった。又諸岡がセッティングを十四オールドでやっているが、三点が本当で十七十四の間違いかと思う。

この勝利は私と諸岡の複を落したのみで勝つたが、大いに自信を深めたものである。シド順なので強い所は佐藤、山本が潰してくれた。私は単のシングルとZのダブルスで出た訳である。この企画は山本が横浜で全部やってくれた。

次に私達はタイ国の留日学生が試合をしたいと云う申し込みがあると云うので勇躍してその計画に入った。当時の用具の点については勿論スチールシャフト以前のナルト製全木製（戦後も随分使われた）ラケット及び羽根を使用し、出征直前の頃ナルトの新製品竹製ラケットを使った。ガットは牛のセミシープ或は鯨筋やシルクを使ったが、シルクは好まなかった。横浜YMC Aに行くときと広田氏がRSSL等のとっておきの外国品を使わせてくれた事を覚えている。中には黒羽根の感じの良いものを出してもらった。

部員の入部申込はポスターを見て弟の所へ出た。六角勉（玩むすみ）榎本延二郎（戦死）で予科一年生であった。六角は浅野総合中学（旧制）出で熱心な部員となり戦後直ちに弟と部を復活し、新入生を仕込み、昭和二十一年に弟が卒業の後幾多の名選手を養成して、各大学に普及、関東学連を結成し初代の委員長となり卒業後日本バドミントン協会常務理事として全日本学連の創設、第一回インターカレッジ（横浜市）の開催と華々しくバドミントン界に貢献し、藤井、広田の名手の良きリーダーとして我が部史に残る人である。戦前六角榎本のペアが入った時東京Yで最も良く走り廻って上達したのは六角であった。私は家がYの近くなので、六角氏は私が手をとって仕込んだつもりで、いわばマナ弟子だと思っている。勿論戦後彼は大いに技術を伸ばし当時の事はほんの手ほどき位しか役に立たなかつたろうが、ネットプレー、スマッシュ、バックハンドと彼はよく走り廻って努力を重ねたものである。外の者ではこの新しいスポーツに彼程走り廻されたらば嫌になつて去つて行つたに違いないと思う。彼が乗り越えてくれなければ戦後の学生バドミントンの興隆は大部テンポが変つたに違いない。

二人の外に星、折田、吹野氏等が入部した。私もこの頃になると覚え初めに負けていた横浜Yの人に勝つ様になった。中国人の寧（にん）さんと韓国人で法大生だった松浦さんにも問題なく勝つ事が出来た。

当時十月が学生の切り代えであつたので昭和十七年十月から私達は学部二年、弟は予科三年、寿君は東京Yへホステルを代えて

ナットの向きを山本が指導し、私達は神宮に所属の部員と練習をした。二人だけの日が多かった。春には勝つ事もあったし、山本と練習した時ゲームを取った事もあった。アムをくれたのかも知れない。佐藤とは殆ど練習出来なかった。試合の日に顔を合せる位で、定期練習には来なかった。事情があったのであろう。佐藤には勝つ機会がなかったにせよ格段の差がある。

現タイ国のワイチヤエンとワイチヤイ、プラナスリ兄弟とウーマイ、フンクラクランなど何かウツカランとかの面々は何れも東大や早大の留学生で、或いは卒業後母国の役人となるため、農林省や商工省（通産省）に派遣されている若者で、日チヨチ歩きの頃からバドミントンをやっている人たちであった。

この試合は私達が本当に勝つ自信は殆ど無かつたと思えるが、知らぬ者の強さで“どん”と行こうと云う事になつて来た。私がプラナスリ兄と新橋の第一ホテルのロビーで待合せ交渉に入った。会場は東京YMC Aが本田さんの肝入りで日泰両国の国旗を掲げて力を入れてくれた。主審にはYCACの時と同様安井哲永（韓国人）、副審には松浦氏や本田氏が当つてくれることになった。私の方は当然単六複三で対戦する事を疑がわなかつたが意外や五単五複との申し出なので驚いた。私の方は何れも6-1-3でやつて来たのでその他は考えられないと申し、相手はダブルス中心だから一歩も譲れぬとアワヤ話はこわれそふになつた。止むをえない私は同点になつたら困るからと云つてやつと6単5複で相手と一致したのであつた。当分は山本主将と相談して6-1-3のつもりで行こうと云い兎に角、複の二チームを編成する事になつた。

単は佐藤、山本、寿、仲地、私、六角、複は佐藤、仲地、山本、寿、森友、諸岡、伊東、村上、本田、花島の堂々たるシドで

対戦する事となり、別掲写真で判るように、私の弟や橋本、新田津川等が出席していた。

このスコアは私の手許に焼けて了つてないのだが、当時の毎日新聞に出ている筈である。

六角の活躍起用については山本と私で苦慮した処であったが、最近メキメキ強い六角の奮起を促したかったのであった。これが結局に於いて失敗のキトであった。矢張りベテランの諸岡を出せばよかつたのかもしれない。六角は単で諸岡より強かつたのが原因だつたが新人だつたのでトキドキの大あがり「森友さん脈を見て下さいよ」と云うので触つてビックリ、タツタツタツと云う調子でこりゃいかんと思つたが遅くストレイトで負けて了つた。そこで私が出てストレイトで一点を取返した時は山本以下大喜びであつた私も跳いて負けると思慮していた有様だつた。私はトスでジャンケンした時チョキを出した相手の指がブルブル震えているのを見て「勝つた」と思つたのを覚えている。この一点が正式国際試合での我国最初の一点だつたことを私は密に誇つている。正式なチーム(クラブではない)が一國編成の外国と国旗を前に対戦した記録はそれ迄にないからである。喜んだ慶応は仲地、寿、山本、佐藤とおつこ抜き五点をあげ五十一と単でキマリであつたからタイには勝つたと云つて構わないと思う。(初の始めの二試合はオープンと云う事になる)トマス杯でもアジア大会でも複五単六の比率の試合はないし、むしろ複の方が少い比率である。寿か山本の何れかがフルゲーム(当時はセットと云い、フレームショットはフォルトではなかつた)だつたと思う。我

私達は学校で顔を合わせた。又はな勝つたんだ。又は何用は失敗か。トスダブルスは互角だ。等の話から「リメンバーダブルスが合言葉となつた。之はパールハーバー常備によりアメリカが「リメンバーパールハーバー」を合言葉にして日本戦争のスローガンにしていることをもじつたのである。

この日露戦(慶泰戦)が九月頃だつたと思う。我々はぜん思つた山本を残して十八年の十二月一日に、十月から最高学年であつた私達は学部三年を仮卒業して皆兵隊になつた。海軍に行つた諸岡、村山、本田等は十二月七日でこの一週間の差をひがんだものだつた。

二十年八月終戦となり陸も海も皆元將校として帰つてきた。弟は経理部の特甲幹で、六角は花鳥の後をとつて陸軍飛行操縦見習士官であつた。花鳥、橋本は永久に帰つて来なかつた。

戦争中の十九年十月に私は陸軍経理学校に於て慶大の卒業証書を授与された。我々の級は従つて、戦後そのまま就職したが、弟は三年、六角は一年(何れも旧制)に在学した。

六角は弟の言葉によれば我る日(二十年の十二月頃)学校で会つて「森友さん「バドミントン」をやりますよ」「バドミントン」をやりますよ。」と云つたそうで、弟から私に相談があつた。十月一日から今の所に入社していた私は、広田さんを頼つて相談に行けと云つた。これが復部のきつかけで、学生二人は広田氏を訪ね、万般の応援を得て平栗小学校を借りて戴いた。幼稚舎は仲々うるさくて貸した貰えなかつたからである。二人の努力で新入部員が入つてきた。奥野有志磨や三橋公夫もその内で、吹野

々はニヤニヤのしつ放して、小休の時私の相手が私の経験年数を聞いて驚いていた。

あと一バツで勝つたのだから。1か2のダブルスどちらかは最悪の場合でもとれるだろうと思つたのは従来の経験から無理のない線で、複が始つてバタバタ負け出してからの事であつた。私と諸岡の単の相手が入っている相手ダブルスに一五十一、一五十一で手も足も出ずに負けた。単で負かした奴がこんなに上手だつたのかしらと冷汗三斗——もう一度車をやつたら負けたかも知れない。負けなかつたにしても複の強さは絶倫であつた。五十三となつて山本組出場フルゲームで負けた。併し我々は日本一の佐藤仲地が居ると云う事が頼みであつた。この相手はグラナスリ兄弟で弟は早大の学生であつたので興奮はモロに上つていた。兄貴は東大出の様であつた。ゲームは一一の後十三オールのセツティング、然も四十四となつて両チーム全力のある限りを傾注し、サーブは四人の間を全てのマッチ・ポイントを賭けて三回も廻つた。その間の我々——今こそ勝つたと思ひ、あゝ駄目だと思ひ、又歡喜の期待にたくらんだ。主審安井氏は現に椅子の上に立ち上つて必死の審判——大変な事態となつた。このジャッジに全精力を注いだ。

かくて佐藤の巨体が横倒しに飛び仲地の細い身体が反対に倒れ、暫くは大喚声の中を動けなかつた。この試合は写真で判る様に泰国の領事が来て終りまで一心に観戦した。相手もスマッシュして決めた瞬間二人ともコートに倒れ、興奮は極度を超えていた。

新田も帰部してはなはだ感心する。又は何用は失敗か。トスダブルスは互角だ。等の話から「リメンバーダブルスが合言葉となつた。之はパールハーバー常備によりアメリカが「リメンバーパールハーバー」を合言葉にして日本戦争のスローガンにしていることをもじつたのである。

藤井の進境は初代監督となつた仲地と六角主將の仕込みで著しく浜松町の工業奨励館等、折柄外地引上げの人々富沢氏日本スポーツ新聞主幹初代日本バドミントン協会理事長——因みに私は五代目である)や今村氏等の応援でメキメキ腕を上げ、仲地、六角、藤井と三者同等の強さとなつた。前述の通り六角の関東学連(最初三校、直ぐ四校になつた)初代委員長を継ぎ、六角卒業の後生れた全日本学連の初代委員長となり、我々O・Bを助けて凡ゆる普及指導に惜しみなくその技術を披瀝した功績は大なるものがある。藤井時代に前田、小宮、広田が入学し、ここに第二期慶応黄金時代が作り出された。仲地が加賀となつて大阪へ去つた時昭和二十四年四月から私が学生に選ばれて二代目の監督となつた。藤井が主將の時で、中沢、前田、広田、朝倉と四ヶ年勤め神田の佐久間小学校時代(寺尾先生が関東学連委員長)を経験して岡主將の前の昭和二十八年十一月に吹野君にバトンを渡した。

昭和二十五年七月に新潟県協会の招きで我が部初めての遠征指導合宿を行つた。藤井(主)小宮兄外は三枝、朝倉、内田、磯見の一年生を教育の為に連れて四日間講習会と対校戦を行つて帰え

った。尚これは当時の我が部の半分で残留組には広田、前田、戸田、高見、中沢、斉藤(孝)等ソクソク居て我が部の厚さを誇ったものである。

昭和二十六年前田主将の時晴れて宿願の体育会に入会が達成した。従来の戦績を認めて貰ったのだが、この年の五月、私の結婚す前に我が部初めてのダンスパーティーを黒の雅園ボートルームで開き大成功であった。創部十年体育会入会記念を銘打ってバンドの途中で私が来客に記念の挨拶をした。

昭和二十七年広田主将の時、今のユニフォームを制定し、ソックスも揃えたが、ソックスはすぐ縮んでしまつて使えなくなつた。マークは私のアイデアを尊重して永く部員が使つてくれた。慶応コールドは広田主将の時神戸のインカレで対立大団体決勝戦で初めて使用し立大勢をボカんとさせた。勿論宿願の時から練習していたのである。このインカレ決勝は私にとって思い出が深い。高見副将の活躍も見逃せないが、岡の奮戦により立大服部を下した功績は大きい。新人吉原は個人戦で江井(当時関東学院一年生で後塾に入り主将を勤めた)にひねられて足のケイレンを引き起こし、その為二日間休養させて最終日北大(神山主将)との準決から使った。玉越立大主将との単は玉越君の穴をつかせる策戦で戦前から勝負があった。

彼のアルアル両足に巻いたほうちが印象的であった。広田が個人戦決勝で立大佐藤に勝つたが左足首を捻挫して団体戦は岡、広田の複のみびつこを引き引き勝ち進み、単はラストに置き、全て出場させずに単二で勝負を決めた。立教は広田の故障に気が付

春は立大のファイターに勝つて初優勝を挙げた。その功績は大きかった。五月の新大会日本は私もカクカクとしていたのが高見副将の切り、この年の成年単は北海道優勝、B、二部別単は広田新・B同三位は藤井第一(現役)同位は吉原、藤井、二位は岡石田とスラリとカップを揃え大いにバドミントンKEYOの潮吹を下げた。

この記念の写真と、前の神戸インカレ三連覇の写真を別掲とする。

幸のウラに不幸がある。春のリーグの不覚を徹底的に叩こうとした私にとって藤井第一の体育会診断は正に鉄槌であった。彼は二年の休部(二年の休学)を余儀なくされたが、私は粒の良い手駒があり、秋には絶対勝てる自信があった。だが試練は高我が部に襲いかかったのである。石田が肩を抜いた。朝倉主将が盲腸になった。この三発が効けばどんなチームでも優勝は望めないであろう。朝倉には代理主将として内田副将を用意したが、幸い手術せず散してリーグに出たが、元気がある筈がない。関東学院にも破れた日の控え室で吉原二年生がつぶやいた「今年の卒業生は気の毒だね」と、この自嘲は私を本当に暗い気持ちにした。ここで選手を叩き直さねばならないと感じた。甘い夢は去つたのだ。立教には佐藤、山崎、新倉、望月、力石、金井が集つた。来年の片石が入り、伏島、野島、越川が入る日を待たねばならないと思つた。十一月の仙台インカレは正にこのポイントである。「三連二復は岡、吉原、小宮(亮)でやれる」とその事を考えたが、実際は仙台には藤井光男と代理監督として出さなければならなくなつ

かない(びつこは三味線と思つた)で、佐藤・広田が単三となつてがっかりしていた様だつた。ホープ佐藤が必ず個人戦の様に広田に潰されると思つた様だつた。慶大は誰と当つても負けると云う広田をラストに置き、不戦で勝つためには佐藤がラストになるより外に道はなく、この予想は當つた。佐藤は広田の故障を見抜き一二となれば勝つと予測した只一人の男だつたらう。岡・吉原の出し方については服部玉殿の出方一つで(佐藤はラストと信じていたので)負傷の吉原は服部の敵ではなく、岡が服部の潰し役であった。会場の外で広田と二人腰を下し三〇分位迷つた挙句「監督さん決めて下さい」と云う広田の言葉で、ホープ岡のトップが決つた。逆に當つたらば、と思うとソツとするが、一二になれば広田の事だから遠い廻つても佐藤に勝つたかもしれないと云う気もする。これでインカレは、初回以来藤井(敏彦)前田(東京)広田(神戸)と三連覇した。奥井部長(学連会長)が観戦されインドネシアから貿易商として丁度来日していた元部員で小宮(元)のパートナーイスマエル君も応援に来た。

このインカレの開幕前日に第一回の東西学生対抗が単十複五で行われ、東軍監督を私、西軍監督を加賀(旧姓仲地)が勤め、主将は東広田、西大岡(國学)君であった。確か三十二位で勝つたと思う。法政は五十嵐、藤川君、明治は鈴木(峻)萩原(誠)君等が居た。この大会から早大が津田主将の下にインカレに参加した。

昭和二十八年朝倉主将の時石田、藤井(昌)の両新鋭が入学し玉腰をして「又慶応さんか」と嘆かせ彼は卒業して行ったがその

朝倉君は二代目の監督として前田君を助監督として昭和二十九年同主将小宮(亮)副将とがダブルで組んで朝倉のリーグ優勝で飾つた。春のリーグで立教に勝つた日、岡が出席になつて困つた。この年は片石入学は失敗したが、藤川、江井が入学し活躍したのだが何といつても気分を一新して優勝に導いた朝倉の功績が大きい。

部長先生に就いては前述の通り戦前は寺尾先生が就任して置き予科は医学部の藤安正先生が副部長になつて戴いて弟や六角が予科生の折、大変御世話になつた。

戦後矢張り兵藤氏の御骨折りで奥井先生が二代目の部長として御引受下さつて爾来、先生が塾長の要職に就かれるのを機会に現部長の白石先生に移つた。

奥井先生は戦前バドミントンの御経験が有り御上手であることは前に記した通りであるが私の弟が二人先生の御子息と同級であつたので私の姓は先生の御記憶にあつた様である。先生の御尽力で体育会に入会出来た事は云うまでもないが、昭和二十一年に現役に対する必要から我々がO・B会三田バドミントンクラブを発足させた時O・B会の会長を兼任して戴いた。先生の渡米期間があり、その間石丸先生と気賀先生に代理部長を御務め願つた。奥井先生は初代学連会長として今日まで学連の父として連盟発展に寄与されて居られる事は周知である。塾長になられて部長をする事が出来ないという理由で白石先生と代わられたのだが、我々が

たつて御願ひして学連会長と三田クラブ会長（この時から三田クラブは会長、部長白石先生委員長私）に御留任願つた。私が  
 の になった時委員長を吹野君と交替した。奥井先生の時の  
 副部長に高校の川上先生、現在は奥野先生をわずらわして居る。  
 奥井先生の時女子に力を入れる様御指示があり、女子高橋（現、  
 上杉夫人）佐藤（現、片石夫人）藤林（現、牧夫人）を擁してイ  
 ンクレ初優勝を成し遂げた事は記憶に新たな所である。  
 私の監督就任当時は東京都バドミントン協会の理事長と日本バ  
 ドミントン協会の常務理事を務めていたので二本立てであったが矛  
 盾を生じるので、協会の方を両方共兼任し学校一本でやって来  
 た。従つて吹野君と交替した二十八年暮から再度東京都の理事長  
 に引出された。昭和三十三年四月迄はO・B会の方だけで暫くの  
 間私が何にもバドミントン界の役に立たなかつた期間を過ごした  
 のである。（昭和十九年卒）

（三七・五・三〇）

岡 道 明

今年で創立二十周年を迎えた、豊バドミントン部。  
 ここに栄えある記念式典を終え、奥井先生を初め歴代部長先生  
 諸先輩のご苦労とご尽力に対して感謝すると共に、現役諸君の健  
 斗を祈るものです。  
 思えば二十周年の我が部の歩みは、日本バドミントン界の歩み

でもあります。

故に、豊バドミントン部の誇りは、日本の誇りなのだと考えて  
 精進していただきたい。又、井の中の蛙になることなく、広いビ  
 ションで練習をして、試合に臨んで欲しいのであります。最近ほ  
 他株の投量も充実している時、大いに奮起してもらいたい。

何も伝統だけにこだわることなく、伝統にプラスされた新しい  
 テクニックを大いに採用して、且つ生み出して、名実ともに豊バ  
 ドミントン道ここにあり！と我が国のバドミントン界に新風を  
 送つていただきたいのであります。諸先輩方が苦勞した頃に比べ  
 ると、設備といい、色々な諸条件が整っている現在だから、やろ  
 う！と思えばやれる筈です。諸先輩の築いた土台に、りっぱな  
 柱や支えを建てて欲しいのです。そのためには、出来る範囲で、  
 O・B百人余の皆さんは、惜しみなく協力するでしょう。

豊バドミントン部に、いや日本のバドミントン界に新しい歴史  
 の一ページを送つて欲しい。（昭和三十年度卒業）

NIPPON TIMES, TUESDAY, JUNE 14, 1937  
 KEIO UNIVERSITY BEATS Y. C. A. C. IN BADMINTON  
 Collegians Make Clean Sweep In Singles Events Played At Yokohama Y. M. C. A.

Displaying brilliant form, the powerful Keio University badminton players ran roughshod over the Yokohama Country and Athletic Club Shuttlers in a match held on the Yokohama Y. M. C. A. floor on Sunday afternoon. The collegians from Tokyo made a clean sweep in the singles events, taking six straight matches besides annexing two of the three events in the men's doubles.

Sato, the No. 1 Keio representative, who incidentally rates as the leading player in Kanto, had little difficulty in turning back the Club's ace player, Captain Agajan, in straight sets by the scores of 15-6 and 15-5.

In both games, Agajan held the lead only to lose it when his opponent came up from behind to win handily with powerful placements and accurate drop-shots. "Bucky" Harriss, playing in the No. 2 slot for the Yokohama players also dropped his match in two sets by the scores of 15-5 and 15-11. Yamamoto completely overpowered his opponent in the first set but he met with stiff resistance in the second set and was fully extended to win.

Sau, the lany Keio No. 3 man played brilliantly to down Boixo in straight sets by 15-6 and 15-3, while Moritomo won from Eastlake 15-8, 15-3. R. DaSilva was defeated by Morooka 15-4 and 16-14, with the former making a game bid for the game in the second set. In this set, DaSilva led 14 to 12 but could not obtain the winning point and allowed his opponent to creep up to deuce and then take the next two pointes for victory.

Weiss extended Rokkaku to a 15-11 first set but he weakened to enable the latter to run out in the second by the onesided score of 15-4.



にて過した食糧事情に運動する者時に何も知られて居らぬバドミントン部に入部するなど、張紙広告などでは思いもよらぬ事でありました。此所に今後の再建にマネージャーとして活躍して呉れた中学より同級の三橋公夫君と共に部員募集並に練習所、資材の確保に務め広田氏の御厚意に依り横浜YMCA(旧YMCAは進駐軍に接收)といつても現在の港中学の雨天体操場ですが、此所をホームコートとして二十一年夏より週二回の練習に入りました。此の当時の部員は約十二名位にて経済、政治学部同級生と当時の専門部、獣医畜産の学生のみでした。一番困った事はやはり球の補給にて、当時は羽根が折れても全部大切に保存し、獣畜の学生が鶏の毛を持って来て呉れ此れを手分して羽根を植直し糸で締めセメダインで固めて次回の練習に使用したものです。球の踵の部分を含む皮が破れてバランスが崩れた時に始めて廃品となり、この間三度以上は直して使用出来たもので一方服装はますますという所ですが、裸足で練習して居った者が多く足指先より血をだすことも多くありました。時勢柄、先輩の援助も無く唯練習場費と羽根代を補なう収入があれば上出来にて、一時は部員が総出してキリンビール横浜工場にアルバイトに出ようと相談した事があります。

此の財政的苦難とは別に当時は試合相手が全くなく此の二十一年夏に横浜YMCAと戦後初の試合を公式にやったのみにて、当時の部を物心両面にて統一することは全く筆舌に尽き難いことでした。昭和二十二年度に入り初めて広田氏の御活躍によりバドミントン界も開拓され、神奈川県並に東京都選手権が昭和二十三年

に開催され、藤井、広田、小宮諸君の名プレイヤーの入部と共に各選手権にて必ず優勝をする慶応全盛時代が開かれたのです。此の気運に初めて二十三年に明治、立憲法政に呼び掛けて関東学生バドミントン連盟を結成して、私が初代の委員長に成り、学連の地固めを始め、二十六年第二回の全日本学生バドミントン連盟結成並びに選手権大会が開かれたのです。

此の様に戦後バドミントン界が今日の姿まで発展した際には戦前より慶応が推進力として、又我が部の戦後の練習開始が今日のバドミントン界の隆盛を如何ほど早めたか、換言すれば隆盛の基礎は慶応にありと断言出来るものがあります。未筆ながら広田氏並びに塾員兵藤氏に部の再建に一方ならぬ御尽力を賜ったことを改めて御礼申し上げます。(昭和二十四年卒業)

## たわごと

前田 鑑一

当部も二十周年を迎え御同慶に存じます。小生もOBの一員として当部が歴史を造って行く事に心から喜びを感じております。ただ一抹の寂しさは發足の優勝に次ぐ優勝の伝統を維持して行けない処にあります。そこで現役及びこれからの人が本文を読んで精神面か、何かで若干でもプラスになれば幸いです。

小生、卒業後十年の余りも過ぎると、バドミントンよりもゴルフの方が性に合いつつ出掛けては年寄りと一緒に終日ゴルフを楽

「今の若い人には、昔の僕のような苦難が分からない。若い時はあまり小さな事にこそせせせしない。若者の行動が、その方が将来は人間的な深みのあるスケールの大きい人にもなる気がする。若人が若さを十分に発揮するまで、例えば、ゴルフのプレイで言うなら「曲つても良いから、思い切つて力一杯クラブパス、後の事はあとで又考えるさ。」しかし一般的な世の中の事はそうはいかない。何しろ幼稚園の入園でさえも試験地獄を経験し、苦しんでいる。これでは今後はたして若さを自覚し、若人の気概を持った人がどれくらい現れるのだろうか。だから良く言えば近頃の若い人は常識的に良くすれているんだ。」と。

そして私自身も若い人の部類に入るかどうかが解らないけれど、自分一人のことで先の先まで悩み自分一人を引っぱって行くのにあくせくしている現状です。(二十七年卒業)

## 二合五勺

大塚 伊二夫

現役時代の思い出などと、急に言われても学生時代は相当社会学の方面が一先懸命? だったもので色々、有り過ぎるくらいで何を書こうかと、まよってしまつた。がバドミントン部に居た頃の思い出としては、予科時代だと思ふが、葉山に合宿した時だった。

「昔の僕には、昔の僕のような苦難が分からない。若い時はあまり小さな事にこそせせせしない。若者の行動が、その方が将来は人間的な深みのあるスケールの大きい人にもなる気がする。若人が若さを十分に発揮するまで、例えば、ゴルフのプレイで言うなら「曲つても良いから、思い切つて力一杯クラブパス、後の事はあとで又考えるさ。」しかし一般的な世の中の事はそうはいかない。何しろ幼稚園の入園でさえも試験地獄を経験し、苦しんでいる。これでは今後はたして若さを自覚し、若人の気概を持った人がどれくらい現れるのだろうか。だから良く言えば近頃の若い人は常識的に良くすれているんだ。」と。

でも平気で過せた。でも程々に練習したせいもあるかもしれない。お昼にも食事で食べられず夕食迄通した。亦夕食のうまさには特別うまく感じた。

去年の事だつたと思う。或る力士の家へ私用で行つた時だつた。力士になりたては、朝二時か三時に起きて家の中の掃除、兄弟子の朝食の支度、後片付けして自分達が食べる頃となつてもう食べ物もなくなって食べることが出来ず、飯もぬきで後は稽古々々で夕方迄夕方二合五勺どころか六、七合のチャンコナベを食べるそうさ。その方が体の為にもよく稽古も良く出来るそうさ。こんな話を聞いて、ははあ俺の合宿時代によくまあそつくりだと自分一人を舐めたものだった。今の現役はどう有るかは御無沙汰して居て知らないが、やはり俺と同じ様な思いをしている者が居る様な気がする。(二十七年卒業)







関東学生(団体)でも二十六年の春に明治大学に一度優勝をうばわれた以外六度の優勝と、文字通り無敵の強さを示して居ります。

その黄金時代に塾の中心として活躍なされた広田先輩のアレいは、残念ながら私が入部した時には丁度O・Bになられたので実際に拝見して居りませんが、記録をたどり、それ以後私の現役時代を中心にした塾の選手の活躍振り、そして他校の有名選手等をひらつて参りたいと思います。

広田先輩は全日本の単複に二度づつ優勝、全日本学生でも二十六年、七年の単複に二連勝、そして二十七年には全日本、全学生全関東の単複の全てのタイトルを握つて居られ、優勝の回数からだけ見ても、その後現れた一流選手の追従を許さぬ大選手と申せましよう。

石田、藤井君の新人を加え全日本に好成績を納めた二十八年は関東学生でも吉原先輩が単で、複で吉原、藤井組が全日本に続いて優勝し、団体戦でも大いに期待されましたが、藤井君の病欠欠場等で春、秋の関東学生、全日本大学と始めて立教大学にタイトルを奪われ、全学生でも単に立教の新人望月君、複に同じく立教の佐藤、山崎組とこれも始めて他校の選手に個人戦の優勝を取られました。

二十九年には一般の予想をくつがえし、この年から新たに監督になられた吹野監督の下、岡主将の活躍、そして新人越川君の殊勲の勝星で関東学生の団体に春秋連覇しました。入部以来始めて目の前に見た優勝の感激は今でも忘れられません。全日本大学で

は、決勝で複2対0の勝勢から立教大学に惜しくも負けましたが個人戦の複では岡、越川組のニューバリーが優勝しました。

岡先輩は全日本の複に二度、全学生の複でもこの大会で二度目の優勝を納めました。そしてこの年行われましたトーマス杯日本代表として大活躍し、最終の美を飾られました。

その他の個人戦では全て立教の選手に優勝を奪われ、この後立教大学の黄金時代を許す事になります。

他校の選手では立教の佐藤選手が、全日本の単で後輩の望月選手に決勝に敗れた以外は、この年のその他の単複のタイトルを獲得し大活躍しました。佐藤選手はどの大会でも常に一、二位を占め、O・Bになられてからも全日本の単に二度優勝し、現在も第一線で活躍中という安定したプレーヤーでした。

三十年には先ず関東学生の単に吉原主将が優勝しました。吉原主将は二十八年に全日本の複、関東学生の単複に優勝という輝しい成績を持ち、立教の佐藤選手の好敵手として、二人の剛と柔の対戦は単に激戦となりました。

札幌で行われた全学生では複で石田、越川組が優勝しました。石田君は札幌出身で、初期の全日本少年の単複に優勝した経歴を持つ経験豊かなプレーヤーで、塾に入つてからは常に今一步の所で優勝を逃して居りましたが、地元で見事タイトルを握り、我々も北国の地で大いに感激を分かちました。

石田組を助けたパートナーの越川君は、十九年につづいて全日本学生の複に二連勝し、塾に輝しい新風を吹き込みました。越川君は三十二年に、トーマス杯日本代表として活躍し、O・Bにな

しかし三十年の春の他の優勝は、関東学生でも優勝しました。又全日本の単では、岡大の上選手が優勝し、始めて岡大にタイトルを持ち帰りました。

三十一年は石田主将の努力もむなしく、全てのタイトルが立教のものとなりました。わずかに女子が高橋、佐藤嬢の活躍により関東学生団体に優勝しました。

高女子は翌三十二年の全日本大学の団体に準優勝し、塾女子部の名を挙げました。

全てのタイトルを独占した立教大学では、過去全日本、全学生の単のタイトルを持つ望月主将の下、三年の片石君、二年の永井君が大活躍しました。片石選手はこの年の全日本の単複に優勝、三十年から全日本複に三連勝した堅実なプレーヤー、永井選手はこの年の全学生、関東学生の単複に優勝し、三十二年から全日本の複に同じく三連勝した。その長身を利しての強打の持主でした。前述の佐藤選手と片石君、永井君、他校ではこの三人プレーヤーが塾の広田先輩に匹敵する優勝回数をもつ、印象に残つた優秀な選手でした。

この様に私の最上級の年の三十二年は、始めて一つのタイトルも取れない不本意な年となり、私も副将という立場にありながら何一つ石田主将を助ける事が出来なかつた事は大いに責任を感じました。

翌三十二年も江井主将、藤井、越川君等の活躍で大いに健闘し

しかし全力を挙げて戦つた選手の間には大いに悔しさを抱き、特に過去に輝しい成績を持つ江井主将、藤井主将の、幾多の部員を率ひ越えて最後迄塾の為につくされた努力には頭が下りました。

豊場主将の下の三十三年、佐藤主将の三十四年と惜しくも優勝に見放されて居りましたが、三十五年には岡新監督の下、全日本大学に八年振りの優勝を遂げ、又全日本の複に中村、山田組が七年振りのタイトルを握りました。

そして三十六年には宮永君が、関東学生の単に六年振りに優勝し大いに気を吐きました。又、私が一年の二十八年から開始された早慶定期戦も、今年で十回目を迎えますが、現在迄塾の九連勝に終り、私も二年生の第二回定期戦より出場させて戴いて居りますが、両校の勝、負を放れた交換には、数々の楽しい思い出がついて居ります。

以上私の現役時代を中心にして、印象に残つた選手、記録の数々を挙げて参りましたが、ここに挙げた人々の他にも、塾の為につくされた先輩の方々、輝しい戦績を取めた選手、蔭の力となつた部員の人々、これらの人々の努力が塾バドミントン部二十年の輝しい基盤となつて居り、最近迄過去のすばらしい成績から見て

他校の後塵をあげて居りますが、今年の二十周年を一つの契機として、次の黄金時代を築きあげる為、O・B現役共に協力し、努力して参りたいと思います。(昭和32年卒業)

## 創部二〇年に際して

吉田 格 磨

当部は今年で二十周年を迎え本当に喜ばしい事だと思っております。その間体育会に加入やいろいろな困難な問題もありました。しかし僕は何の苦勞もなく一応O・Bとして皆様と御付合が出来るのも当部にいた御蔭だと思っております。

私は入部したのが二十八年の四月、早いもので当部に關係して九年に成ります。その間色々面白い事、辛い事(僕にはなかったが)がありました。しかし今考えると本当に楽しき思い出と成っています。中でも特に印象に残っている事が有ります。それは僕が二年生の秋季リーグ戦の慶立戦で有ります。ダブルスは京都のインカレで圧倒的勝利をおさめ、安心していたのですがシングルのインカレで惨敗をしているので選手は劣等感を拭いさる事が出来ず、我々も一抹の不安を感じていたのです。ダブルスは岡・越川組、吉原・石田組が勝ち二―一でリードをした。しかしシングルのオーダーは、岡―山崎、吉原―新倉、越川―望月、小宮―佐藤、江井―片石、石田―力石、で四分六分で慶立の不利が予想された。しかし吉原さんの試合は圧倒的勝利を予想していたが、試合が始

まると第一セットは取られ、第二セットもセツティングで二―〇となり絶対絶命のピンチであった。最早、負戦の一步手前である。しかもサーブは新倉が保っていた。長いラリーが続きそして吉原さんがフオアハンドからのカットがネットの上に本当に乗った様な感じだった。もしその時シャトルがネットインしていなかったら私の現役時代には一度しか優勝しなかったと思うと今でも背筋が寒い思いがする。そして吉原さんは苦戦の未勝利を納めた。

続く越川―望月の試合は当時全盛期にある望月には正直に言うて、最高調の越川でも勝味はなかった。しかし上り坂の越川は第一セットを先取し(この時越川の精神力を見直した。あんなオツトリした顔をしているのに)試合はやや、優勢に進んだ。しかし第二セットに入り望月はじりじり追いつけてきた。ついに越川は12―13とリードを許した。越川のサーブ後、長いラリーが続き望月が越川のフオアハンドへの強烈なスマッシュをたたき込んだ。(当時望月のスマッシュは本当にたたき込む様な感じがした。)ほんの少しまったくわずかであったがラインアウトとなった。その時の経緯は法政先輩の若林勝氏であった。僕は少し離れた場所で見えていたので、インかアウトが分らなかった。しかし判定はアウトであった。その時の若林氏は目をつぶり本当に印象的で今でも忘れることが出来ない。当時、絶対の自信を持っていた望月はセツティングをやらないうでサーブを保った越川は続けてポイントして、ストレートで勝った。勢いづいた慶立は5―4で立教を破り優勝した。それ以後現役時代に優勝していないだけに

まったくわすかであったがラインアウトとなった。その時の経緯は法政先輩の若林勝氏であった。僕は少し離れた場所で見えていたので、インかアウトが分らなかった。しかし判定はアウトであった。その時の若林氏は目をつぶり本当に印象的で今でも忘れることが出来ない。当時、絶対の自信を持っていた望月はセツティングをやらないうでサーブを保った越川は続けてポイントして、ストレートで勝った。勢いづいた慶立は5―4で立教を破り優勝した。それ以後現役時代に優勝していないだけに

## 合宿生活の思い出

鈴木 嘉 明

### 一、先輩に叱られたこと。

昭和二十八年の夏も例年通りの酷暑が続いて居た。入部第一年度の事として、バドミントンそのものにとにかく慣れて、半人前位シャトルを打てるようになった頃の夏休みの合宿であった。日吉のグラウンドのトレーニングも終り、いよいよ生れて初めての合宿生活に多くの期待と、一抹の不安を抱いて仙台へ向った。昼食後の休憩時間に仙台市内を見物する事が許され、又帰宿後も、午後九時迄は自由時間になっていたで、日中の暑さと練習の激しさを

感じて居た。入部第一年度の事として、バドミントンそのものにとにかく慣れて、半人前位シャトルを打てるようになった頃の夏休みの合宿であった。日吉のグラウンドのトレーニングも終り、いよいよ生れて初めての合宿生活に多くの期待と、一抹の不安を抱いて仙台へ向った。昼食後の休憩時間に仙台市内を見物する事が許され、又帰宿後も、午後九時迄は自由時間になっていたで、日中の暑さと練習の激しさを

うので、食事当番はもとより、体育館でも準備体操が終るとコート  
の周囲を鬼蹴り、ランニングを交えて十数回、それが終ると下  
級生係のS先輩や、H先輩がラケットを右へ振ると我々は走って  
コックをレシーブする構えをし、左に振ると左側に走り、へばり  
の来た頃に、O先輩先輩が二人がかりで、我々は一人ずつコート  
に呼ばれ、倒れるまでレシーブを続けさせられ、苦しいとか何と  
か言葉で表現出来ない位に訓練された。シャツは十分もすれば汗  
でビッシヨリで身体に吸いつき、やたらに喉が乾く。思い切り水  
を飲んだら最後、身体中クタクタになってしまう有様で、何と云  
つてもつらい練習であった。しかしその時我々の多くは、「何く  
そ、今に我々も上級生になったらこの様な練習を下級生に出来る  
のだ」という気持で頑張ったので、最初の合宿参加者の大半は四  
年卒業迄楽しく部生活を送ることが出来たのだらう。

## 二、後輩を説教した事。

入部以来数多くの話題を残して昭和三十一年には我々が最上級  
生になってしまった。振り返ってみると意外に早く四年生になっ  
てしまった様な気がしてならなかった。三十一年の合宿は以前一  
度経験した長野市郊外の、浅間温泉で行われた。当時は四年生と  
二年生が部員の三分二を占める程で賑かだった。合宿所が温泉  
場だけに話題も豊富だったが我々は、夕食後の外出時間で米あず  
きを食へに行ったり、信州のそばを食へる事が楽しみだった。狭  
い温泉町の事として変化は少く、自由に遊ぶ程の余裕もなく、専ら  
食べ歩きであった。或夜門限になつても二年部員が帰宿しない事  
があった。我々四年生は帳場に坐り込み、違反者の帰りを今や遅

しと待ち受けていた。そこへ十分ほど遅れて大勢の二年生が一緒  
に戻つて来た。我々は待っていましたとはかり先頭のO君、F君  
に注意したところ、逆に「先輩の時計は進んでいますよ！我々  
の時計では未だ門限五分前ですよ。」といつて時計を見せた。ま  
さかと思つたら何と四・五人が時計を計画的に遅らせて帰つて来  
たのだ。そして拳銃の果てにそば屋が遅かつたので帰りが遅れた  
などと云い訳をしはじめたから、我々は頭に来た。早速四年生の  
部屋に呼んで説教をと思つたらそろそろと、七・八人並んで入つ  
て来て、教では我々と同じ位の頭教が揃つたので、敵も仲間が多  
く安心したのだらう。ニヤニヤ笑い乍ら入つて来て坐るやいなや  
「エヘ」と笑つた者が居たから益々我々はカッとしてしまった。  
止むを得ず突然大声を出して怒鳴つたら連石に皆も驚いた様に静  
かにおとなしく下を向いてしまった。ここでようやく我々も落着  
きを取り戻して、翌日からの食事当番、体育館の掃除番などを命  
じ、我々が交替で説教をした。我々も人数が多く、説教時間も長  
く、相手もだんだん悪いことをした様なムードになり納得して無  
事消灯となつた。

以上二つの思い出は、それぞれ間に四年間の時差があり、現  
在では既に一番前の話にならうとしているが、今もつてバドミン  
トン部生活の思い出の中にはつきり残っている。失敗した事、苦  
しかった事が人生にとつて忘れられない思い出となり、貴重な経  
験となることを体験し、将来にとつても楽しい話題となつて残る  
事であらう。(昭和三十三年卒業)

## 部生活の思い出

岡本 出

この間は鶴の百寿祭を記念して立派な体育館が出来、今年には部  
の二十周年と最近では御芽出度続きです。これにリーグ戦等に優  
勝すれば文句のない処ですが、是非そうなつてもらいたいもので  
す。さて僕等が卒業してから早五年、部の生活も懐しく感じられ  
、その一つ一つが色々な意味で有意義な四年間であり、O・Bに  
なつてからも何か離れがたいものがあります。それというのも先  
輩や後輩又同学年の者が互に励まし合い、又助け合つて来たから  
だと感謝しています。現役時代の僕等の学年は良いにつけ悪いに  
つけ何かと話題を散らし、怒られたり責められたり？ しまし  
たが、その為か割合に皆まとまつており、今でも東京の連中は月  
一回位集まつては色々話に花を咲かせて居ります。これという  
のも個性の強い者同志が自然に結び合つて、何か相通じる処があ  
つたからでしょう。

うれしい事があつた時、淋しい時等誰からともなく電話をかけ  
合つたりしています。合宿生活では色々といはずら失敗を繰返  
して来ましたが、その話ほどれを取つても同学年の諸氏に関係が  
ある事ばかりなので、次の機会にゆずりたいと思います。

さて今でも続いてO・B廻りを現役諸君がやつている様ですが  
会社に行つても会えなかつたり色々と言ひ出しにくい事があつた  
りして大変苦勞している事だと思ひますが、僕等も三年の時に

練習して、部生活の思い出は、それぞれ間に四年間の時差があり、現在では既に一番前の話にならうとしているが、今もつてバドミントン部生活の思い出の中にはつきり残っている。失敗した事、苦しかった事が人生にとつて忘れられない思い出となり、貴重な経験となることを体験し、将来にとつても楽しい話題となつて残る事であらう。(昭和三十三年卒業)



# 学生時代日記雑感

尾関守弘

この所何となく現役から遠ざかつて行くのを感じる。これは年々古きO・Bが感じるものかもしれない。私自身若さが無くなりフライトが無くなった事はたしかだ。それを感じ出すと、三年の頃から必要にせまられてつけ出した日記を読み返す事に依つて、フライトを無理に出させている。その中から二、三若き日の良き思い出の日を拾つてみよう。

32年11月1日金、日中W・K戦の記念ショッキを持ち歩く、はてもいい所だ、夕方六時より幹部会有り、女子をインカレに行かせる行かせぬでもめる一レベル問題とか感情的に走り一応二、三日決定をのぼす事になった。この席上監督さんより明日の対関東は4年も出る事になったと語り、あれだけ3年以下でやると云つていて今日云い出した所をみると監督さんも気になっていたのだから初めから負ける気であるのが氣にくわい。もつと自信を持って云つていたが内心では危ぶんであの様にうまく云い出して中止したのだろう。

32年11月2日土、今日の対関東は9-0で完勝した。福田がメンバーチェンジで中川に勝つたが自信がついたろう。昼の時間いたが昨日は江井さん等4年から豊場に2・3年じや危ないと圧力を掛たらしい主将の立場からすれば無理もないかもしれない。

今日監督さんが坊主になってきた。一樣の決心じや出来ない事

W 豊越	江藤 S 佐	越	豊
場川 2 (15-10) 0 10	井井 0 (6-16) 2 10	竹竹 0 (2-15) 2 10	川川 2 (15-15) 0 10

豊場の試合本当に良く勝つたものだ。  
第一セット、スタート良く4-0としたが次第に離された。  
第二セット、13-6 逆離されたが小刻みに13-13のシニースのまま5-0で押し切つた体力両方とも消耗している。  
第三セット、8-1とコートチェンジを取られたが次第に追掛  
け佐々木は足がもつれ、両者疲労がはげしい、12-9、13-13。  
ついににおいついた、佐々木体力を考えノーシニース14-13とリードしたがチェンジサーブ佐々木あせりサーブミス、豊場ロングサーブを上げ佐々木スマツシユ！ 佐々木ひっかけ2位を確保す  
決勝対立大

W 佐竹	井井 2 (2-15) 2 15	宮沢	豊場
佐藤	0 (4-15) 2 15	0 (8-15) 2 15	0 (8-15) 2 15
S 佐藤	0 (5-15) 2 15	井井	
	0 (7-15) 2 15		

だ、学生がなるのと違つて家庭有り会社が有るのだから。原因は何とすれキエラー全員は価値が有る。別に江井さんより坊主になれとの指示なし。夕方になつて思つていた通り又君より電話が有つたがきつぱり坊主になつた方がすつきりしていいんじゃないかな。これで4年がならなかつたら考えものだが越川さんの口ぶりじやならしい。だが伏屋さんはどうか。それにしても初めバリカンが動き出した時はおかし様な悲しい様な変な気持だつた。どうも今日は初めに板垣の坊主頭が氣になつたが予感したのかもしれない。

32年11月3日、対法大6-13で優勝、頭から取り乗だつた、伏島、松田がメンバーチェンジで出たが伏島氣力なし、松田は、星野にたいふねはつたがやはり実力の差、いかんともしがたし。大番狂わせ有り明治が関東に5-4で負けた。メンバーを見ると高田があと出るだけであまりメンバーを落してない様だ。後で考えてみると対関東の時、メンバーを落さなくて良かったと思う。今日僕等が見ていた様な気持でもし先目負けていたら見られたかと思うといやなものだ。明治も又坊主らしい(注、この時は、明治がならず法政がなつた法政の石井のおかげでとほやかれた。)

32年11月22日金、午前中たいした相手でもないので屋島へ行つた、今朝来た重志さんと間々田、安川、野島の五人です。午後後の対日大は3-0で優勝。準決勝の対関東の試合で豊場が鬼神の如き動きをした。試合が終つた時の江井さんの嬉しそうな顔、多分一生忘れぬだろう。

準決勝対関東

W 豊越	江藤 S 佐	越	豊
場川 2 (15-10) 0 10	井井 0 (6-16) 2 10	竹竹 0 (2-15) 2 10	川川 2 (15-15) 0 10

33年3月4日火、今日本朝に二子玉川発走つた、まさかと思つていたが！傘を用意していったが重富と高校生二人と監督さんだけが降り多摩川から電車を利用しただけだ。もつとつぶれると思つたがよくついて来た。多分明日はたいふねるんじゃないかな。それにしてもばてた多摩川二子、元佳吉一日吉の間がはてた。最後の奴を捨てるのも乗じやない(注、当時の監督吹野さんは日吉-多摩川二子玉川-多摩川造現役と一緒に走つた。現役のトップクラスとせつていたし、特に二子玉川から多摩川迄は電車に乗る考えのせいさく早く、ついて行くのがやつとだつたのを覚えてる)

33年3月5日水、今日行つてみたらほとんどつぶれていた。入部以来初めて皆より遅れて走つた。走れば走れるが年になつたせいでだろう。

33年12月8日日、体育館にて引渡しの為の具舎を見たすばらしいものだこんな立派なのは、せめて一年間でもバドをやつてみたかつた。

33年12月15日日、本部にてたむろしコート開きへ対O・B戦をやつたシングル佐藤-佐竹ショウの価値はない。後でアメラクの

バスケをやった試合前腕を打ち最低。フロアが少しすべる様だ。一般学生のバドが最後に行なわれたが遊びだ。コートの使える来年の練習方法は考えて行こうべきだ。

まだまだ有る。33年関東学生女子W1位2位アジア大会、久里浜の合宿百周年記念バレードエトセトラ――

どうです。思い出しませんか？ 楽しい学生時代の思い出、バドミントン部にさち有れ！ (昭和三十四年卒業)

### 福田 竜 太

昭和三十四年卒業以来、僕は土建会社の現場勤務となって、日本中の山又山を渡り歩いて道路作りの稼ぎに従事している。

山口県厚狭を振出しに、南は佐世保、北は北海道の白老の道路工事まで、ウクレレを持った渡り鳥だ。三十五年七月北海道・白老の工事現場にいた時は、慶応高校修学旅行団に逢い、びっくりした。川上先生はじめ、高校バドミントン部の諸君ともゆつくり話し合えた。死ぬほど懐しかったものだ。

今は和歌山有田川流域の工事に従事している。クラスメートの尾関君から塾バドミントン部創立二十周年記念だから、何か感想を書いて寄越せと云って来た。二十周年か、立派なものだなあーと思った。僕でさえ、こんなに懐しいのだから東京に居る皆や、特に創立者とも云える森友先輩はどんなに感慨無量でおられるかと思う。僕は随分と慶応義塾の御世話になったが、憶えている事繰返し同じように頭の中に浮んでくることと云えば、高校一年よ

り始めたバドミントンの事ばかりおおよそ勉強に関する思い出はさっぱり、まあせいぜい教師に怒られた記憶ぐらいしか浮んでこない。つまり僕の塾生活のほとんどは、バドミントンで勉強は部員たるの資格を維持する為落着かないように努力したいというようなものだった。しかも僕のバドミントンは傑出した強さであり、輝かしき戦績を残したと云うのではない。試合に出ると一回戦はまあまあいけたが、一回戦以後は「御期待ニソエナイ」というよりも誰も「御期待」してくれなかつた始末だ。全国的にも強い我が部では、異色の存在だったからかも知れない。ただ、試合にはそれほど弱かつたが、合宿とかトレーニング等、試合以外の集団活動では、うるささも熱意も一流だったようだ。僕の在塾中のアルバムは昭和二十七年より三十三年までの七年間の我が部の写真で埋まって、まるで我が部の歴史を表わしている様である。そのアルバムを日本中の山を持って歩いている。寂しい時や仕事のうまき行かない時、開いて眺める。それを開いて眺めながらペンを取ると、懐かしさに頭が混がらかつてくる。空と山と溪谷しかない。町まで数キロという工事事務所のベッドの中で、アクロウや仏法僧の鳴くのを聞きながら……。塾中等部出身の僕は、その頃中等部にはバドミントン部がなかつたので、高校に上つてから初めてバドミントンをやった。たまたま大学の方は部の黄金時代だったらしい。高校部の実力は、試合に出るたびにあつというまに負けるという可愛いらしきであつたが、合宿とかトレーニングが大学の人達と一緒にしたのが素晴らしい。その厳しきときたら、何度止めようかと思つたか分らないくらいだ。しかし、こ

目的でない多様な種の人々とならぶことができるのは、何れも州から北は北海道まで気候風土の幅が広い。塾バドミントン部を維持していただけるのも、一重に部の時代のトレーニングの賜である。精神的にも肉体的にもだ。塾バドミントン部が積極的に上達して、強くなるということは勿論部の目的であり、第一条件であるが、それにもまして部が人間育成、築精神完成の道場であるということも、僕は信じて疑わない次第である。

辺境の地に行くにつれ、僕がどんなに部を懐かしく思い、部に感謝しているかということの一部の人にも知つて貰いたかつた。矢先、部誌を出すから何か書いてくれと云われ僕の気持は感慨無量に溢れた。

今日も又ダイナマイトの音を聞きつつ仕事をしている僕にとつて、十年後二十年後どんな所で何をしようとも、このような企てには喜んで参加させてもらいたい。(昭和三十四年卒業)

丸善舗道株式会社 有田川作業所勤務

### 部創立二十周年に思う

野 島 義

バドミントン部創立以来二十年、毎年先輩と後輩が送迎される

一年の時の札幌遠征メンバーは吉原、中村(頼人)石田江井、藤井、越川、豊場等の各先輩が活躍され、特に石田、越川組のダブルスが前年(岡、越川組)に引続いて加藤、片石組(立夫)を破り二連勝した年度でありました。

石田先輩の家にて祝杯を受ける石田先輩の満気な顔、御家族並びに遠征部員一同の喜びに溢れる笑顔が今でも思い出されます。

又吉原先輩が、この札幌の試合に於いてロマンスが生れ、その後御結婚なされたという二重の喜ばしい事も補足致します。試合日程が終了しても石田先輩の家に全員御世話になり昨日は月寒牧場、今日はリング園、明日からは阿寒湖と札幌市、内外を集団で出張したものでした。その後、幾度ももの遠征試合、合宿等に於いて常に他校より羨ましがられました。と云いますのは現役諸君も既に経験された人もいるでしょうが、非常に塾出身の先輩よ

り励まされ、歓待されるからです。このことは小生自身、卒業してみますと非常に簡単なことでありますが実はなかなか実行出来ない事柄であります。

塾体育会バドミントン部に入部して良き先輩、良き後輩に指導され苦業を共に過した幾年月、現在実社会に仲間入りして早や二年を過ぎて部生活において味った種々の事柄が小生にとっては非常に役立っているし又小生自身も誇りとして居ります。

この上は今日より明日への前進にO・B、現役一致団結して塾及び部発展の爲精進努力しようではありませんか。

五月十一日

札幌にて

(昭和三十五年卒業)

## 我々の時代の思い出

小杉良雄

塾を出てから早や二年目を迎えた今、短かった体育会の厳しい生活を思い起こすことに忙しい中にも楽しい事である。我々が新兵(二年生)の時代はキャプテンは江井さん(當時は一番悪く感じました)、マネージャーは藤井さんであり、同級生は二十六名近く居たと記憶します。練習はまだ体育館が無かった為天現寺の幼稚園の体育館を借りて、五時半より八時半迄、週四回行われわざわざ日吉から通ったものです。電燈が暗くコートが二面、(ほとんどレギュラーが使用)しかない上まわりでシャトルを打つ場所がせまかったので一般部員はそこを取り合って打っていた

我々の学年には仇名がよくついていて高井はネコ、ネコウサギ、マグネコ、松田はキンチヤン、重富はホイキタ、マカリ山中はアイチ、ベビキヤング、瀬戸はエビ、探険隊員、原野は豆タンク、カントクサン、小生はキートン、中村さんは〇〇カバ隅田さんはケロ、等です。特に高井、重富の横浜コンビ、瀬戸、山中の学連コンビは……でした。(矢札)考えれば小生等も学年が進むにつれてだんだんとしまらなくなっていたことも確かですが、……

さて我々が四年の時の戦績をおつとより返ってみますと、春のリーグ戦が四位、秋のリーグ戦が三位、そして女子が創部以来初めて二部に転落したこと、横浜で開催された全日本選手権でダブルスに中村・山田組が七年振りに優勝したこと、大阪で開催されたインカレで実に八年振りに優勝をもたらした事等です。特にインカレに於いて、準決勝対立教大学戦において複一―のあと、単で中村が小宮を破り、山田が坂垣(弟)を破って決勝に進み対法政大学戦に於て、同じく複一―のあと、宮永がフルセットシングルの大激戦の末、星野に勝ち、又中村、山田も小田・富田をフルセットの末下して栄えある三度目の全国制覇をなしたあの瞬

ものでした。がもつばら一年の時は幼稚園の運動場をグルグル回ったり外に出て上級生(主に福田さん、尾関さん)の後についてかけまくったものでした。今その辺を通るとなつかしさがわいてきますから、なんとなく無駄ではなかった様です。(トレーニングの時走った東横線綱島―多摩川間も同様の思いです)そして春秋リーグ戦とも成れば神田国民体育館で大声をはり上げて味方に選手に応援する、という様な具合でした。我々が二年になってからはキャプテン豊島さん、マネージャー尾関さんでしたがすでにこの時には同級生は十名位に減ってしまいました。止めた者の理由は色々あったと思われませんが、その時はちよつと淋しかったです。二年の時の部生活もほとんど一年の時に比べて大差はなかったと思いますが、私はもはやバドミントンの魅力に取付かれて止められなくなつてしまいましたし、下級生が入つて来たので彼等に負けぬ様、よけい一生懸命やる様になったと確心しています。三年の時代はキャプテンは佐藤さん、マネージャーは野島さんで我々もはや上級生、何かと雑用が増えはじめたものでした。しかしこの年から日吉に百年祭の記念事業の一つとして記念館(体育館)が建てられたので、ようやく自分達のコートが持てる様になりました。(バドミントン部の練習は同館の中央、右側がバスケット部、左側が器械体操部が練習することになりました)コートは横に三面とれたので、一般部員もコートに入れる回数が多くなるし、又コートのまわりで自由に練習が出来た様になった訳です。かくするうちにいつの間にか、我々も最上級生の年を迎えました。同期で最後まで残った者は、男子、高井、松田、重富、山

自分自身この四年間の体育会の生活でうれしかった事と云えば、①インカレで優勝出来た事、②早慶戦にシングルで二勝を上げたこと、③一応マネージャーとしての自分の責任をはたし、後輩岡野にその任をゆだねた時、④合宿でのさまざまな生活等であり、又つらかった事と云えば①トレーニング、合宿等でしぼられた時、②マネージメントが行きずまった時、(幸い打開出来ましたが、)③受験生が他校の様思うように入らなかつた事等です。

下級生の時はいろんな面で上級生に不満を持っていましたが、自分が上に立つて初めてその難しさが解り、途中で折れてしまつては四年間通した体育会の生活を送らなければ、スポーツマンの根性をつける為にも、真の団体生活を送るためにも無意味であると思います。小生自身四年間通した部生活を送つたが故に、立派な先生方、先輩方、そして愉快な話し合える友人、後輩にめぐまれた事を幸福に思い、これから胸を張つてO・B―として社会を渡つていけることは楽しい事です。



更に一層の部発展を祈つてとりとめない筆を置せていただきます。「部創立二十周年、御芽出度、御座居ます。」

(昭和三十六年卒業)

## 部生活雑感

松田均

卒業して早くも二年目、気軽な？ サラリーマン稼業もどうやら板について来た今日この頃ですが、今年は当部の創立二十周年に当る意義ある年にあつて雑感を一文。有益な忠告や思い出を諸先輩が寄せられる事でしょうが、僕は二年浪人した後入部しいつの間にか不本意な部生活を送つてしまつたにがい経験がありますので、卒業した今でも長嘆息を禁じ得ない僕の轍を踏んでいただきたくない為敢て体験を通しての忠告を試みてみます。

苦しい受験生活に別れを告げ夢にまで見た慶応義塾、俺も今日からKOボーイだ、さあハリキッて又バドミントンをやろうと誰でもが勇んで入部して来る事だろう。自分は高校はあれだけやった実績があるのだし少し位のブランクはすぐ取戻せるさ、と云う自信に満ちて僕の場合も心の隅に自信とも過信ともつかない安易な気持が有つた事は覆い隠すべくもなかつたがハリキッていたのは確かです。とにかく浪人を経過して入部して来ると上級生は「君はバドミントンから遠ざかつていたのだし焦らせずじっくりやるのだな。」とやさしい言葉をかけて下さるに違

二子玉川園までのロードワーク、多摩川大橋の土手まで来ると誰か彼方にゴールの橋がかすんで見えるのだが走れども走れども近くはならない。あれは鏡気楼ではないのかとナンセンスな事を考えながら走つた記憶がある。

その当時監督であられた吹野先輩が我等と同じペースで完走されたのにはいささか驚かされた。人間やる気があれば出来るものだ云う貴重な教訓を予えて下さつた訳であるが、さぞや御苦しかつたであろう。吹野先輩といへば忘れることが出来ないことがもう一つ。それは例の坊主事件。あれは確かぼくが一年の秋のリーグ戦で法政に敗れた翌日の出来事だつたと思うが、試合前の準備体操が終つた頃、粋なソフトをかぶられた先輩が御見えになつたので、「今日は！」と挨拶をしたらおもむろに帽子をお取りになつて会釈を返された。ひよいと見るとあるべきところにあるべきものが無い。一瞬もう駄目だと観念した。(その吹野先輩の心意気にも応える事が出来なかつたのも残念に思われてなりません)案の定試合後江井キャプテンからレギュラーは明日まで坊主になつて来る様に通達されたので泣くに泣かず愛すべき毛髪とおさらばした訳だが案外さばさばして気持が良いし、第二手入れに要す

ない。辛い練習でもとかく甘くみてくれるだろう。練習をやつてみると考えていた程球も走らず身体もガタガタしている。こんな管ではなかつたのにと不安になる。この辺が一番問題のポイントになる所です。ここで「考えてみれば或る期間ブランクが有つたのだからうまくいかないのが当然なんだ。徐々に体調を整えて気長にやるさ」と、「さあ大変だ。今後は人一倍練習に励み早く皆のレベルまで行く様努力しよう」ここが充実した部生活を送れるか否かの分岐点になつて思えてならない。僕は先輩の含蓄ある君の言葉を甘受してしまつた前者であつた為いつの間にか一年が過ぎ二年となり焦りに焦つたあげく「はつ」と思つた時はもう卒業と今考えても悔まれてならない過程を経てしまつた。

こんな時は強固な意志の持主でなかつた僕はつい麻雀はじめ学生が経験する甘い誘惑に手を出してしまつたと云えば言訳がましいだろうか。とにかくあの時はもつと練習を一生懸命にやつておけばよかつたなああとつくづく後悔される。ここで一年目勝負説を強調したい所以である。浪人であれ何であれ、或るブランクを経て入部して来る諸君は、自分は相当のハンデを背負つているのだからよほどしつかり練習をしないと立派な満足いく部生活を送れないんだということを肝に銘じていただきたい。勿論自己の体調も考えずに無茶になれと云う意味ではないが……。こんな事ばかり書くと灰色の塊みたいな生活を送つたと感懐いされるかも知れないが楽しく真き思い出も多々有つた。あの苦しかった複合のトレーニング、もう十回目だからこれで最後だろうと高をくつて頂上まで駆け上つたと思つたらおもむろに「ラスト一回！」の

とにかく苦しくもあり、悲しくもあり、悔しくもあつた部生活も四年間無事に過ごせた事は思いやりある諸先輩、うるわしき友情を発揮してくれた同輩の御蔭と感謝の気持で一杯です。今後は伝統ある塾体育会バドミントン部のO・Bの一員とし微力ではありますが、部発展のためにせいせい努力する事を御約束すると共に、一日も早く第二の黄金時代の来る事を祈つて止みません。

どうか現役諸君頑張つて下さい。(昭和三十六年卒業)

山中武一

社員は吾が社の社長程ワンマンはいないと思うであろうし、又一、二年の部員は体育会の中で我部ほど封建的な幹部はいないであろうと思うであろう。しかしそれで良いのだ。卒業し学生時代を邁進する時、部生活の思い出以外に何が残るであろうか、特に苦しかった時代を回想するほど愉快なものはなく、そこに又自己の成長を見出すのである。勿論、楽しい思い出が多いに越したことはないが、快なり最終学年の全日本優勝、これは下級生の争え

てくれた最大の贈り物であった。慶早戦に初めてアトラクションではあったが良き伴侶！である海老様とダブルスに出場出来たのも又快なりである。しかし大半の思い出というものは、学連詳しく云えば関東学生バドミントン連盟の中につきる。大学二年の後半から中立地帯の学連に向向し、上級生になる過程を部外で生活したということは誠に不幸であった。部から速く離れたものという意識が常にあり、部に帰ってはかなりの劣等感を抱いていたことは確かであったし、久々に練習に行つて「又新入生が来た」とでもいいたげな下級生の眼に会うのが一番恐ろしかった。これが又練習に顔を出せなくなる一因にもなった。O・Bになつてからも未だその感情が抜けないのは如何ともしがたく、日吉には顔をささなくともお茶の水へは気軽に行ける自分に寂しく感じる時さえある。このような具合なので我部にとっては大変悪い先輩であると創部二十周年にあつて十分反省し、良いO・Bになるように心掛けるつもりである。

先日森友大先輩が「日経」の交遊抄なる欄にバドミントン一筋に生きる喜びを書かれておられたが、部活動に於ける友人関係ほど嬉しいものはない。私も卒業後一年、この欄をお借りして同期の者と呼び掛けたいのだが、如何であろう。「高井君以下同期の方々よ、半年に一度くらいは会おうではないか、御連絡をどうぞ。」それはさておきかような訳で、私事山中武一は伝説あるバドミントン部に塾高から教えて七年間も寄生しているながら部に尽していることは何も無い。学連に於いても部に尽力したとはお世辞に

ないと思ひます。その部が所属する日吉記念館に於ける練習場は他ならぬではないでしょうか。部にも練習場を確保した方が練習は立派なものであります。私どもはもはやその上にダブルスもかいて練習していたのでは何んにもなりません。日本のバドミントンは未だ世界のレベルに較べるとどうしてもAクラスという訳にはいきません。レベルを上げやがては世界制覇をなしとげるその原動力となり得る様な強い部、そして且つ体育会部員としてさらに塾生の範となる様な学生として立派に誇るに足る集団となりたいものです。先輩諸兄の歩まれた過去を振り返り輝かしいものは現部員一同誇りに思い、又さらに改善すべき点があればそれに目をつぶる事なく我々の力で出来る限りの事をし、あとは将来に於ける部員諸君の力を借りなければならぬでしょう。

さて現在の我部の状況を一寸書いて見ますと、今春のリーグ戦で一勝四敗という成績に終りあわや最下位かと思われましたが、やつとの事で五位になり、創設以来最悪の事態に直面しております。理由をつければいくらでも云い訳を言えるとは思いますが、我々としてはともかく結果だけを見、負けは負けである事に変わりはないのですから、来たるべき秋のシーズンには春の巻返しをと思っております。最後に我部が、部員全体の一致団結を見、さらに先輩諸兄ともども努力して再度全盛時代をつくり上げる日の近い事を祈りつつ筆く事にしますが、と同時に今日ある部の為になり日なたになりお尽し下さいました方々に御礼を申し上げます。

すぎないが学連の思い出は楽しい。まず創造の楽しみがある。各地方への出張旅行がある。およそ学生とは遠くかけ離れた生活を味わつたものだ。先輩諸君！浜野、福田、そして平林諸兄に続け。 (昭和36年卒業)

## 部創立二十周年に寄せて

主将 宮永武司

日本に於ける最初の大学バドミントンチームが慶応義塾に出来てから今年で二十年目を迎える事は我々部員一同非常に誇りに思つております。バドミントンが比較的我国に於いては新しいスポーツであるという事を考えると二十年という年月は決して短くないと思います。しかも日本の指導的先駆者としての我部の過去は我々現役から見ても素晴らしい一語に尽きると思われます。この様な立派な部に所属させていただいております部員一同は先輩諸兄の輝かしい歴史を傷つける事なく、いやそれ以上の発展を見るべく日夜努力を怠つてはならないと思いつつ練習に励んでおります。しかし現状は過去に照らせば明瞭であります様に低滞気味の感をまぬがれないので何とかこの二十周年を機に黄金時代の再度の到来を実現したいと思います。建物に於いて基礎工事が大切である如く、急激な発展を望む事なく日本に留まる事なく広く世界のバドミントン界に誇るに足る部として発展させたいと思つて

## 昭和37年度 部活動報告

- 4月3日、8日 春祭準備  
於大塚市スポーツセンター
- 4月22日 O・B対現役親善試合  
於日吉記念館
- 4月29日、5月3日 レギュラー合宿  
於日吉記念館
- 5月8日、12日 関東学生新人選手権  
於国民体育館  
男子複 轟・山本組が4位に入賞
- 5月14日 新入生歓迎会及び定期総会  
於真機会館
- 5月20日、27日 関東大学春季リーグ戦  
於日本女大体育館  
女子塾 4 } 1 埼玉大  
" 5 } 0 明学大  
" 4 } 1 杉野短大  
" 2 } 3 日女大  
" 4 } 1 千葉大

以上の結果4勝1敗で第2位となる

○5月21日～28日 関東大学春季リーグ戦

- 於品川体育館
- 男子塾 3～6 立夫
- ” 3～6 法大
- ” 5～4 早大
- ” 3～6 明大
- ” 2～7 中大

以上の結果早大と同順位となり5位決定戦を行う。

塾 5～4 早大

○6月11日～16日 関東学生選手権

- 於国民体育館
- 男子単に於て宮永三位に入賞、男子複に於て鈴木・田中組ベスト8に入賞

○6月17日 三田クラブ主催ダンスパーティー

於産経国際ホール

○6月24日 O・B対現役親善野球大会

於網町グラウンド

○7月3日～12日 夏季トレーニング

於日吉陸上グラウンド

○7月19日～25日 夏季合宿

於日吉記念館

○8月2日～5日 東日本学生選手権

於札幌

以上の結果第5位となる。

塾 2～3 埼玉大

この結果三部転落

○10月28日 体育会創立70周年記念式典

於日吉記念館

○11月2日～9日 インターカレッジ

於仙台

男子団体戦

二回戦 塾 3～0 福岡大

準々決勝 ” 3～0 関学大

準決勝 ” 2～3 法大

三位決定戦 塾 3～2 中央大

以上の結果3位入賞

男子単に於て宮永優勝、男子複に於て藤・山本組6位に入賞

○12月8日 総会兼納会

於東機舎館

以上

### 創部二〇周年記念後記

久米 融

今年二月二十六日O・B会に於て創部二〇周年記念行事を行うことに決定した。

男子単にて宮永優勝。鈴木7位、兩名とも東西対抗出場権を獲得。

○9月9日 部創立20周年記念式典。模範試合。祝賀会。

於日吉

○9月16日 早慶定期戦

於早大記念会堂

O・B塾 3～4 早大

女子 ” 0～3 ”

男子 ” 8～7 ”

○10月16日～21日 関東学生秋季リーグ戦

於国民体育館

男子塾 4～5 法大

” 4～5 明大

” 3～6 立夫

” 4～5 中大

” 5～4 早大

以上の結果第5位となる。

○10月20日～27日 関東大学秋季リーグ戦

於日女体育館他

女子塾 2～3 千葉大

” 1～4 明学大

” 2～3 杉野短大

” 1～4 昭和女子大

” 1～4 日女大

野野原君にその委員長職務の請を授け、栗原・吉田・岡本・田島・小西の各先輩諸氏には記念式典委員を、尾関・安川両先輩には部誌編集の御仕事を御受けもって頂くことになりました。現役として根本君と私が記念式典を、西村・北田・新井の三君には部誌の方を引き受けて貰うことに決めました。

翌三月二日に早くも第一回の委員会が開かれ、行事の内容を協議したのでありますが何分にも十周年の記念行事をやっておらず又他にも前例のないこととて、その規模、形式がわからず、結局調達可能な資金に応じた行事をすることに致しました。以後は毎月一回多い時には二回といったように委員会を開いたのでありますが、先輩の皆様には御仕事の忙し中を度々御出席下され、卒業後数年以上経っているにも拘らず部に対する熱意と深い愛情は誠に感激に耐えないものでありました。

苦心談といいますと、先に述べましたようにこのような企画はこれ迄に例の無いことなので、その規模等に招待者名簿を作成するのに骨を折りました。始め招待するしないは別として一応関係者を選んだ所百五十数名にのぼりましたが予算の関係上極く内輪にといいことで五十数名に落付きました。記念品の選定の場合もそうでしたが、何でもこのことをするから予算はこれだけ必要であるというのではなく、みみっちい話かもしれませんが、予算の範囲で最上の式典をという訳で皆さんの計画をだいたい制限したようでした。

又当日の式次第及び招待者の配置には気を使いました。式次第の方は後に行われた慶応義塾体育会七〇周年のそれとほぼ同じで

したのでほとんどしました。席配置についても部長先生に御相談した事が良く当日恥を掻くこともなく済みました。部長先生の御話では、その事については奥井先生にも大変御心配下さったと承わっております。

又資金については、O・Bの皆様も大変だったことでしょう。今度は二〇周年とパーティー、そしてO・B会費といったように財政的に多大の御負担をおかけした事とお詫び致します。又その集金にあたった諸君も定めし苦勞したことでしょう。始め私は彼等にその交通費、通信費の一切を自己負担でやってくれる様にとのみしました。つくづく自分の非力を憎げなく思いました。それにも拘らず、皆がよくやってくれ予定の九〇%以上の集金率を挙げる事が出来ました。

この様にO・Bの皆様、現役各員の努力により、当日の式典は和気あいあいの内に無事に終った次第です。又決算の方も四万円の黒字という好成绩で部誌編纂の方に役立ちました。

私個人としては、この行事を通じて諸先生並びにO・Bの皆様方と緊密な接触の機が得られ何かと大変勉強になりました。

二〇周年記念責任者として根本君と共にその責を無事遂行出来ましたのも皆様の御支援御協力の賜と深く感謝し、厚く御礼を申し上げる次第である。

(慶応義塾体育会バドミントン部の一層の発展を願って)

一九六二年十二月十六日 深更

## あ と が き

安川 通夫

慶応義塾体育会七十周年と共に我がバドミントン部も二十周年を迎え、九月にその記念行事が行われた。

日本のバドミントン界を常にリードして来た我が部がそれを記念して本誌を発行する運びとなり部関係者並びに先輩各位の御協力を頂き深く感謝致して居ります。

部誌発行の計画は前々より一部先輩の間で話がありましたが実現されず現在に至つておりました。部の歴史を知つて居るのは一部の人のみで、各々の現役時代を中心にしか知らないのが現状ではないかと存じますので本誌を通じて皆様にご部の歴史の概略を知っていただきたく思い編纂してみました。

部誌発行は定期的に行なう計画がありますのでぜひ続けて頂き先輩各位、現役各位の結束を図つて頂きたく存じます。

高殿君を本誌に記載する予定でありましたが費用その他の点で掲載不能となりました事をお詫び申し上げます。殿君は大部分整理が出来て居りますので引続き発行される部誌に掲載して行きたく計画致して居ります。又不慣れの為発行が遅れました事を深くお詫び致します。

部誌発行に御協力頂きました各位に重ねて御礼申し上げますと共に今後共皆様の御協力と御指導を御願ひ申し上げます。

■ 編集責任者 尾関 守弘 ■ 慶応バドミントンクラブ  
■ 表紙デザイン 谷 工 画 堂 ■ 印刷 慶立印刷

なお部誌作成に当って諸先生、先輩各位の御協力に厚く御礼申し上げます